
ゴッホの旅

川上 宏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッホの旅

【Nコード】

N2570P

【作者名】

川上 宏

【あらすじ】

2006年にゴッホの旅と銘打ってパリからベルギー、オランダ、フランスのオーヴェルとゴッホが住んでいた場所を辿った時のことが書いてあります。

過去に下のブログに掲載した文章を手直しして載せています。

ここでは写真を載せられませんので、写真を見たい方は下のブログをみてください。

- 10199124102.html
http://ameblo.jp/hansehi/entry

有名作家のゴッホ通

ある雑誌に有名作家がゴッホの取材で1月にアルルを訪れたらしい。

ゴッホがアルルに訪れたのは真冬の2月だから、1月に訪れたその有名作家はゴッホの気分を味わい、寒さに震えながらアルルの夜空に輝く冬の星座の美しさに感動し、これが『星月夜』と『夜のカフェテラス』のあのわずかな路地の狭間から降る雪のような大きな星をゴッホに描かせたのか、同じ冬季に無理して出かけたおかげで新たな発見があったと喜んでいた。

あれ？何かおかしい。ゴッホを勉強している者なら誰もがその雑誌の紀行文を読んだら違和感を覚えると思う。

『星月夜』と言えばサン・レミで描かれたよな、とか、きつと『ローヌ川の星月夜』なんだな、でも描かれたのは夏のはずだ。『夜のカフェテラス』なんて夜のカフェテラスと言う題名のとおり夜にカフェテラスでお客が呑んでいるところを描いているのだから寒い冬のはずがない。

本当はどちらも製作は9月なのだから夏の星空をゴッホは描いているのである。夜空は冬がふさわしいと言う思い込みからこの有名作家は勘違いしたのかもしれない。が、この有名作家、西洋絵画に詳しいらしくよく西洋絵画の蘊蓄を執筆している。

私はゴッホのことを少し勉強し、その流れから印象派の画家を少し知っているだけの知識なので他はまったく知識がなく、それゆえスペインのプラド美術館に行ったときなど、そこに展示されている絵画をほとんど理解することができなかった。しかし、この有名作家はこのプラド美術館に飾られた絵画も色々な蘊蓄を交えて説明していた。たいしたもんだと感心していたが、ゴッホでこのような書き方をするのなら、もしかしたら他の知識も難しそうに書いているだけで、中身はかなりいい加減なのかもしれない。とは言っても、

日本人はゴッホ好きだが、実際にゴッホのことを詳しく知っている人は少ないのでその有名作家ばかりを責められない。

熱烈なゴッホファンで「もし、ゴッホの時代に生まれていたら絶対にゴッホの作品を買っていた」と断言する人が多いが果たしてそうなのだろうか。

今の権威がついたゴッホの絵だから凄いと思っただけではないだろうか。

もし本当にゴッホの時代に生まれてゴッホの絵を買っていたと言うのなら現代でも無名画家の作品を買っているはずだ。無名画家だから今の時代なら高くても20万円くらいだろうし安ければ数万円くらいのはずだ。

無名画家の絵は権威がついていないし資産的価値もない。中の絵だけしか価値はない。それも、世間の誰も認めない絵である。誰にも触れる機会がなくて売れないのではなく多少世間の目に触れているのに売れないのである。そのような絵をゴッホの時代に生まれてればゴッホの絵を買ったと言う人は、最低1枚は買っているはずだ。何も言わず、オランダ、ハーグ時代の絵の師アントン・マウフェの絵と知られていないゴッホの絵を並べてどっちがすきと聞いたら、ほとんどの人がきつとマウフェを選ぶと思う。

なんの先入観もなしに、ただ絵を見比べるのならゴッホの絵を選ぶ人はほとんどいないはずだ。権威がつくからこそゴッホの絵は素晴らしい、色使いが最高だ、などと言う感想が多く出るのでと思う。色使いにしてもゴッホは印象派の影響を受けているし浮世絵の影響も受けている。彼独自の獨創性ではないのだ。だから本当はゴッホの絵は難しいと思う。いったいどこが素晴らしいのか探るのが難しいからだ。

これは私自身に言っていることで、それゆえゴッホの絵が本当に素晴らしいのかを確認するためにもゴッホの軌跡を追いたいと思った。

ゴッホについて知っていること

あなたはゴッホって知っていますか？との質問をしたらほとんどの人が知っていると答えると思います。でも名前は知っているでしょうが、名前以外に知っていることはと訊けばなんと答えるでしょうか？うんなんと、ひまわり。と答えた方、OKです。

それ以上のこと答えた方、例えば、耳きり事件、黄色い家、アルル、この辺までを答えればあなたはゴッホ通です。間違いなく。

ゴッホの名前は有名だけれど、ではゴッホの自身はと訊けば、ほとんどの人が分かっています。でもそれで正常なのです。ほとんどの日本人は何も知らないのですから。それでもゴッホの絵が外国の美術館（例えばゴッホ美術館）から日本に貸し出され展示されると長蛇の列となるんですよ。ゴッホの絵はまだ見たこと無いけどという人も多いでしょう。

でもでも、ゴッホのことを知れば、お、ゴッホって面白いかもと思う人もいるかもしれません。少しでもこのこれを読んだ人の中からそんな人が出てくればこれを書いた甲斐があるというものですよ。できればこの執筆を読んで私もゴッホの旅をしたくなったと思ってくればしめたものなのですが、普通の人でこんなフリーの旅なんて中々できないだろうから、これを読んで一緒にゴッホの旅をしてくれる、つまり疑似体験をしてくれたら嬉しいですよ。

パリのシャルル・ド・ゴール空港に着いたのは夕方であった。日本からソウル、そしてそこから乗り継ぎでパリ。

世界地図を見ると日本からパリに行く途中に韓国のソウルがあるように見えるけど、北周りでパリに行くとソウルに行くのはかなり遠回りになるんだよね。

チケットを申し込んだときは、途中下車だから良いかなんて考えていたんだけど、あれあれ、所要時間が長いぞと、ちゃんと調べる

と遠回りをしているって気がついた。アジアナ航空と言う韓国の飛行機に乗ったから成田から韓国の仁川、仁川からパリに飛んだんだ。欧米って人の名前の空港付けるよね。それも大統領。日本の感覚からしたら何か違和感。シャルル・ド・ゴール空港って最初、おしやれな名前の空港だと思ったけど、ドゴール大統領の名前だと気がついたときごついなあと思った。まあそれはいいんだけど、何しろ疲れて空港に着きました。乗り換え場所はちゃんと考えたほうがいいよ。一番安いというだけの格安航空券だけで選ばないほうが良いかも。

全日空なら出発日によってかなり格安航空券あるから、上手くそっとういっ日の出発日を使い直行便をゲットが楽だよー。それに成田の全日空ホテルって、宿泊料金もリーズナブルだし、驚いたのは2週間の駐車料金、1泊泊まっただけなのに無料だった。宿泊料金と2週間の駐車料金って同じくらいの料金だから凄く嬉しかった。もしチケットも全日空だったらホテルでチェックインできるので荷物もそのまま飛行機に運んでくれるからとても楽だと思う。別に全日空からお金もらっていません（笑）。

今回のゴッホの旅には私と妻以外の同行者にソウ姉さんがいる。ソウ姉さんは妻の日本語学校の先輩で、パリに渡りパリの男性と結婚をし、その後離婚をしている。そして数年前に大きな交通事故を起こし、一生歩けないと医者から言われたが、奇跡的に杖をつきながら歩けるようになった根性のある女性でもある。

ソウ姉さんとは1回韓国で会っている。セヒの母国、韓国に春先に行ったとき、セヒの実家の帰りに寄ったソウルで里帰りしていたソウさんと会ったのだ。

初めの印象？弾けていました（笑）。「ひろーしさん」と初めて会ったのに親しげな顔をしてハグハグしてきました。まあ初めてといてもスカイプ（インターネットの無料電話）で何回か軽い挨拶はしたことあるんですけど。それにしても韓国人なのに初めから解

放的です。韓国の人って日本人に対しては警戒するというのが当たり前だから珍しいです。さすがフランス人と結婚したところのある国際派。

杖を上手く使いながらソウ姉さんは歩きます。ペレー帽に男っぽいジャケットにパンツ、黄色いレンズの眼鏡をかけているのは光に弱いようだ。ここにも事故の後遺症が。事故の前はかなり美人だったとセヒが言うけど今はその面影は微塵も感じられない……。というほどひどくも無い。よく見ると確かに事故の面影が顔にも見られるけど、それは言われなければ気がつかない程度だ。歩く早さも当然杖をついているから早くは無いんだけど気になるほどでもない。

ヨーロッパのチェーンホテル

今日はどこに泊まるんだろう。ソウ姉さんに全て任せているから精神的に楽だ。去年セヒと二人で回ったパリ・マドリッド&パルドールの旅のときは私が宿も全て手配したから宿に着きチェックインできるまで不安で仕方が無かった。インターネットで予約したから本当に予約できているかが心配だったのである。宿だって言葉がメルシーしか言えない私だったので着くまで不安であった。だから手帳にホテルの名前をあらかじめ書いて置きそれをタクシーの運転手に見せる工夫もした。普通の日本人の発音でホテル名を言っても絶対通じないから手帳にあらかじめ目的地を書く作戦は思ったより効果がある。

でも今回は全てソウ姉さんに任せてあるから大丈夫である。そうは言ってもソウ姉さん、さすがに今日の宿は予約してあるけど明日からはまだしていないらしい。その場に行って探せばいいよと言っているけど大丈夫かな、まあフランス語ペラペラだから大丈夫だろう。

今日の宿は明日の行き先を考えてパリの郊外にある高速道路沿いのホテルでヨーロッパ中にチェーン化しているACCORグループアコルのibisイビス。

最近、日本のビジネスホテルがチェーン化したところがたくさん出て来たがヨーロッパはこのようなホテルが一般化されているようだ。

これらのチェーンホテルの特徴は、清潔、安い、見つけやすいが基本になっています。ただせっかくヨーロッパに来てそれらのホテルに泊まるのは情緒が無いので、私は是非と勧める気持ちにはなりません。

チェーン化したホテルにはF1グループというのもあり、そのホテルはイビスなどより安いだけけれど、共同トイレに共同シャワー

なので若い人には良いけど、私たちはちょっとということ、今回は泊まりませんでした。

日本のチェーン化したホテルの相場は5〜8千円くらいだが、ヨーロッパは4〜80ユーロです。F1は2〜40ユーロくらいだとソウ姉さんは言っていました。泊まりたい人は確認を。まあ確認するほど高くも無いと思うけど。これらの料金は日本のビジネスホテルの料金と似たような料金かなと思ってしまいましたが、為替によってめっちゃ高です。私たちが行ったときは1ユーロ140円前後でした。

空港を出て高速道路沿いのイビス（セビとソウさんはアイビスと）だったのでそっこのほうが正しい発音だと思う）は空港から10分くらいのところにあつたが、イビスのホテルに着くころにはもう太陽が沈みかけまわりの景色は白みかけていた。暗くなり始めた景色と高速道路沿いということもあり、フランスだーという感じはなかった。それでもウキウキした気持ちがあつた。美味いものが食べられるということではなく、何を食べさせられるか分からないというのが楽しいのである。

英語圏は、メニューを見れば多少どんなものが出てくるか予想できる。しかし英語圏ではない外国ではメニューを見ても何が何だか分からないのである。だから面白い。しかし今回はソウ姉さんがいるのでそういう楽しみはないと思う。メニューを見て何が何だか分からなければやはりソウ姉さんに聞いてしまうだろう。ホテルのチェックインもソウ姉さんが指示してくれ、私はそれに従いクレジットカードを出す、宿泊カードを書くなどをする。ソウ姉さんがいなければフロントの行動を逐一見て、何を要求しているか分かるようにするが、今回はリラックスしている。

言葉がわからなくてもチェックインでやることは大体同じなのでフロントの動作を見ていれば何を要求しているか分かるものである。まあそ

れが旅だからそのストレスを楽しむのもありなのだけれど。

ゴツホ年表

季節は秋の始まり。これが夏ならまだ太陽がさんさんと輝いていたと思うが（夏の南ヨーロッパは夜の10時くらいまで日が沈まない）今は日が沈むのも早くなっている。

完全に暗くなってから夕食を食べに行った。ホテルの隣のレストラン。やはり疲れていたのでも遠くに行くのは勘弁してほしかったので隣で助かった。日本と時差があるので日本時間だと夜中の3時、夕食でも夜食でもない時間帯の夕食。しかし、身体を慣らすためにも夕食はちゃんと摂らなければいけない。

レストランは小さい。10テーブルくらいの広さである。しかし、バイキング方式であった。大きくも無いレストランでバイキングが面白かった。が、日本では夜中の3時なのだからうどんとか雑炊なら食べられるが洋食である。お皿にほんの少し豆とかサラダそして少しのパン、スープを戴いた。セヒも同じようなものであったがソウ姉さんだけはたっぷりさらに食べ物を載せていた。それでもフランスだからといってセヒはワインを注文している。

ソウ姉さんと妻で乾杯。

私を知っている人は私が13年間寝たきり生活をし、8回手術をして、やっと外国旅行もできるようになったと知っているが、この執筆を読んでいる人は知らない人が多数だと思えますので少し私の身体を説明します。

私は脳脊髄液減少症という脊髄液が交通事故などによる大きなショックにより漏れてしまった病気を患い、脊髄液が漏れることにより自律神経がめちゃくちゃになりさまざまな症状がでてきます。私は40以上のさまざまな身体の変調が起きました。

めまい、眠れない、頭痛、体温調整ができない、逆流性食道炎、食事がほとんど摂れず半年で体重68キロが38キロまで激痩せした。などがおもな症状である。

私の病気は当初原因不明の病気で、検査しても何も悪いところが見つけれないので結局心療内科に行けということになってしまう。私は心療内科にお世話になることはなかったが、私の病気仲間と心療内科にかからない患者はお目にかかっていない。

5年位前に篠永医師（今は教授）がこの病気を発見してくれたからこそ今の私がある。といってもまだ私の体は全盛時の30%くらいではある。だから食事は細いし、飲み物も温かいものしか飲めない。お酒なんてもつてのほかなのである。それゆえ妻とソウ姉さんだけでワインで乾杯となるわけです。

私はヨーロッパに行くのは病気になつてから2回目である。

時差が一番気になったが、前回ヨーロッパに行ったときデパスという精神系の薬を寝る前に飲んだら30分で眠れ、次の日がとても気持ちよく起きられたので今回もそれを服用した。案の定30分くらいで眠れ、翌日も気持ちよく起きることができた。この薬を2〜3日使えば時差は完全に取れる。

さあ朝起きればいよいよ出発である。

朝食はパンとコーヒーもしくはジュースという簡単なものは無料で、ホテルで食べることができるのでそれを食べて出発。

今回の旅はゴッホの生まれた地から自殺するまで暮らした土地を訪ね歩く旅である。但し、全てではないし、ゴッホの年表通り、順番にそれらの地に行くわけではない。ゴッホが暮らした地をパリから近いところから順番に回っていくつもりです。だから20歳のときの地から生まれたところに行くということも考えられます。

一応ゴッホの年表をつけましたが、馴染みのない街も多いと思いますのでサーと目だけ通してください。

ゴッホは色々なところに住処を変えたのですが、生まれた国オランダ、お隣の国ベルギー、そして波乱のフランスが主に住んだところで短期間ですがイギリスにも住んでいます。

さあ今から目指す地はゴッホが25歳のとき伝道活動したポリナージュです。え、ゴッホって牧師さんだったのと驚いた人も多いと

思います。

ゴツホの家系は、画商と牧師関係が多いのです。あくなるほどそれがゴツホの絵に影響を与え絵の道に進んだんだあ、と思った人は鋭いですよ。

ゴツホ年表

1853年3月30日、オランダ北ブラバント州フロート・ズンデルトに長男として生まれ、一年前の同月同日に死産した兄の名前を貰う。父（牧師）41歳、テオドルス・ファン・ゴツホ。母34歳、アンナ・カルベントウス。

1857年5月1日、弟テオ生まれる。

1864年（11歳）、ゼーフエンベルヘンにある寄宿学校に入学。

1866年（13歳）、ティルブルフにあるウィレム二世校に入学。

1868年（15歳）、ウィレム二世校途中退学してズンデルトに戻る。

1869年（16歳）、グービル美術商会ハーグ支店に勤務。

1873年（20歳）、グービル商会ロンドン支店に栄転。

1874年（21歳）、ユージエニーに失恋。10月にパリに転勤

1875年（22歳）1月、ロンドン支店に戻される。5月、パリに転勤。

1876年（23歳）4月、グービル商会解雇、同月イギリスのラムスゲイトの寄宿学校の教師になる。六月、寄宿学校がアイスルワースに移転したためにゴツホも移る。

1877年（24歳）1月、ドルトレヒトの書店に勤める。5月、アムステルダムで牧師の勉強を始める。

1878年（25歳）7月、両親の住むエッテンに戻るがベルギーのブリュッセルにある伝道養成学校に行き八月から受講するが進学を断念。12月に無免許のままベルギーのポリナージュ炭鉱に行き伝道活動をする。

1879年（26歳）1月、伝道師会から仮免許を貰うが4月に免

職となる。

1880年(27歳)、ブリュッセルに行く。ファン・ラッパルトと交友が始まる。

1881年(28歳)、エッテンの両親の家に戻る。従妹のケーに恋愛感情を持つが冷たい拒絶をされる。これが原因となり12月にハーグに移り、両親の元を離れる。

1882年(29歳)、マウフェ(いとこの夫)に本格的な絵の指導をもらうが直ぐに喧嘩別れをする。売春婦のシーンと同棲を始める。

1883年(30歳)、シーンと別れる、ホーヘフェーンに行き、その後ニューアムステルダムに移る。12月、両親が引っ越した先の又エネンに行く。

1885年(32歳)、父急死。『馬鈴薯を食べる人たち』を描く。

11月アントワープに行く。

1886年(33歳)、1月、アントワープの王立アカデミー(美術大学)。に入学するが進級出来ないと分かり3月にパリに行く。

浮世絵を知る。

3月、テオを頼りパリに行く。

4月、モンマルトルのコルモンにあるアトリエに通い、エミール・ベルナル、トゥールーズ・ロートレックらと知り合い友人となる。印象派の技法を勉強していく。

1887年(34歳)、2月浮世絵版画の展覧会を開く。

1888年(35歳)、2月アルルに行く。10月ゴーギャンがアルルに来て共同生活をする。

1889年(36歳)、4月テオ結婚。サン・レミのサン・ポール・ド・モーゾール精神病院に入院する。

1890年(37歳)、5月オーベールに行く。7月オーベールで自殺をする。

モンス

時速140キロ、早いー。

ソウ姉さんが言うにはヨーロッパの高速道路は140キロ当たり前だそうです。東京 京都3時間で着くということだよ。ありえない。

「ひーろうしさん、ガイド料、たっぷりねー」運転しながら姉さんが明るく言う。

「まあこの旅の本を書いて売れたらね」何しろ冗談風な言い方で笑いながら言う。

『そんな金ないよー』冗談だと思いがちよと本気も隠れていてそうで怖い。ソウ姉さんにちゃんとした報酬を払うとは約束していない。まあセヒがそれとなく話してはいるが、今回の旅行費用を負担してあげればいいのでは。宿泊費、ガソリン代、食事代、で結構な金額になるが、プロとして雇うとなると1日3万円は払うのが相場だろう。ソウ姉さんは車も貸してくれるのでその分1万円くらい上乗せも必要かもしれない。

この旅行の最後に近いときそんなことを話し、「日本からお客さんが来るのなら、全部旅行費用持ってもらい+2〜3万円でやるよ、車付だよ、通訳もOK」と言っていたから、車も付いて、かなりお得だから興味のある人は紹介します。

私たちがゴツホの旅で初めに向かうところはモンスと言うところで、ここはゴツホが25歳のときベルギーの、ボリナージュの炭鉱に伝道師として行きます。ボリナージュというのは地方の名称でモンスは町の名前です。だからボリナージュのモンスに行くと言うのが正解です。

ゴツホはボリナージュ地方の、いくつかの町の炭鉱に伝道師として行くのだけれど、貧しい人を見ると自分の衣服さえ渡してしまう

ほど、あまりにもめりすぎたために、最後は乞食のようになってしまふのです。そして教会からもお前は駄目だと烙印を押されてしまふんですよ。ゴツホは純粹であるがために世間的なやりかた（今のお寺なんかと同じで商売でやっているような感じ）に反発を覚えるから独自の信仰を正しいと思ひガンガンパッションでやるんです。でもそういうことは組織の中でやると浮きますよね。だから挫折するのです。そして画家を目指そうとするのですがその話は又その土地に行つたときに。

モンスには昼前には着いた。駅のプラットホームには切符を買わなくても入れる。なんか映画の中のような景色だ。妻と二人で良いねーと言ひ合つた。

さてゴツホの住んでいたところを探すのに駅の隣にあるインフォメーションに行く。インフォメーションはロゴのEが日本にもあるのと同じロゴだからここを訪れた旅行者もすぐ分かんと思う。このロゴは、ヨーロッパの主要なところにはたいていあります。

ここはベルギーと言ってもフランスに近いところだからフランス語が通じる。これがオランダに近いベルギーだともうフランス語は通じなくなる。

ゴツホの住んだ街はキューム村といい、モンスの街から3キロ離れたところにあると言ふことが分かりました。歩くには少し遠い。さりとしてバスで行くのも探すのが大変なので旅行者はタクシーをお勧めします。

キューム村は田舎町なのでモンスで昼食を摂つた方がいいだろうということになり、モンスの旧市街に行くことにした。

ここに他のウェブからコピーしたモンスのガイド文章を載せます。

ウェブコピー

小高い丘の上に広がる町。人口9万3千人。日本ではまだなじみが少ないモンスの町の歴史は、この地に西暦650年頃、僧院が建てられた時代にさかのぼります。

かつてこのあたりは炭鉱が多く、工業が発展しました。

画家ゴッホはこのボリナージュの炭鉱地帯に宣教師としてしばらく滞在し、住んでいた小さな石造りの家が残っています。

またカーニバルで有名なバンシユの町はモンスの東15キロ。

モンスはパリ北駅から電車で1時間20分のところにあります。

モンスに新市街があるのか分からないが、昔ながらの旧市街があるとこのバスで行くことにした。このバスはとても可愛くてマイクロバス位の大きさでカラフルです。そして無料です。

モンスの街の中心にはバスで10分もかからなかったと思う。何しろ帰りは歩いて駅まで来たから。

妻はウキウキして洋服屋があると私に断りもなしに入ってしまった。私が前を歩いているときもです。

後ろを振り返ると妻がいない。日本なら問題ないのですがここは外国です。もしもはぐれたらと妻は考えるより洋服のほうに頭が行くようです。どうも頭で考えるところがひとつしかないようです。

妻がいなくなる度に文句を言っても繰り返します。鶏ですね(笑)

昼食はベルギーの田舎町の洒落たレストランに入りました。妻とソウ姉さんは当然ビールを昼間から飲みました。

モンスの街なんておそらくほとんどの日本人は知りません。でも立派な街です。ゴッホを訪ねなければ絶対に行かない古い街です。坂が多いかな。ゴッホの旅って、絶対観光ガイドに乗っていないところを旅するから面白いと言つのもあります。今回始めてヨーロツパらしいところです。

伝道師のゴッホ

モンスの街からゴッホの住んでいた家は3キロといっても簡単に分かることはありません。ソウ姉さんは迷うとすぐに車を止め窓から「マダム」と大声を出し、人を呼び止め聞きます。3キロだけで5回は聞いたような。

「あ、あの家ゴッホって書いてあるよ」レストランでした。

真ん中の白線がない2車線の道路で、両サイドにびっちりレンガ造りの家が並んでいるまっすぐな道を走り、少し苦労してゴッホの住んでいた家を見つけた。

街の中にあると言う感じだったが、2車線の道路からほんの10メートル入った場所は自然がいっぱいであった。とてもよい雰囲気である。まだ秋の始まりだが落ち葉が少しあった。

妻と二人で秋を演出しようとゴッホの家の入り口の石の小道に落ち葉を並べ写真を撮った。

^{アパート}家の中を覗くと朽ち果てている。とても人が住める

状態ではない。これから改装して、ゴッホの家としてお披露目をする予定のようだが、今は朽ち果てた家の中であった。

ゴッホは1878年の年末から1880年10月まで、つまり25歳から27歳までの2年弱をボリナージユですごす。

はじめの1ヶ月はパチュラージユ、8ヶ月をヴァム、残りの1年余をキュエムという村に住んだ。

ゴッホは結構人生で挫折を繰り返している。年表を見てもうと分かるが、1868年（15歳）、ウィレム二世校途中退学してズンデルトに戻る、と記した。つまり学業で身を立てることに挫折したのだ。

ゴッホってオランダ人なのに、フランス語、英語を喋れるし結構頭が良い。でも学業ではアウト、きつと詰め込み主義の勉強は性に合わないのだと思う。私もそうだからこのころのゴッホの気持ちと

てもよく分かる。

学業をあきらめたゴツホは次に、1869年（16歳）、グービル美術商会ハーグ支店に勤務となる。

もともとゴツホの家系は画商と縁がある。ゴツホのおじさんはグービル商会創業者の一人でもある。といっても、自分の画廊を他の大きな画廊と合併させグービル商会を作ったのだから、創業者だれど最高権力者ではない。と言うより引退に近かった。だから合併と言うより吸収なのかもしれない。

まあ何しろそういつてがあるからこそゴツホもグービル商会に入れたし、弟のテオもグービル商会に入ることになる。

始めは、ゴツホは優秀な画商であった。ロンドンにも栄転で行った。しかしだんだん、売る絵に疑問を持つようになる。「こんな絵を売っていいのか」と言っただかどうか分からないが、優秀な画商が駄目な画商に変貌して行く。

そして、1876年（23歳）4月、グービル商会解雇となるが、同月イギリスの、ラムスゲイトの寄宿学校の教師になる。6月、寄宿学校がアイスルワースに移転したためにゴツホも移る。

学校の先生といっても給料も出ないから、食べることができないだけの先生である。そしてこの先生も経営者ともめて辞めてしまう。

ゴツホは生徒側で考えるから経営者とは衝突してしまうのだ。

ゴツホの父親はズンデルトで牧師をしている。ゴツホは神の家で育ったわけだから当然信仰心も強い。と言うわけで1877年（24歳）1月、ドルトレヒトの書店に勤めた後、5月、アムステルダムで牧師の勉強を始める。が、これも結局駄目だあとになってしまふ。そして、1878年（25歳）7月、両親の住むエッテンに戻るが、ベルギーのブリュッセルにある伝道養成学校に行き、8月から受講するが進学を断念とまたもや挫折。

それでも、12月に無免許のままベルギーのポリナージユ炭鉱に行き伝道活動をする。と言うことでやっとポリナージユの炭鉱が出てきました（笑）。

そう、この地はゴツホが挫折を散々味わって流れ着いた地なので、ここでゴツホは一生懸命頑張りました。

炭鉱は資本主義の走狗、ゴツホは労働者のために怪我人の介護や老人の見舞いなどをやり伝道活動を積極的にアピール、そしてその活動が認められ6ヶ月の期限付きではあったが伝道師の資格をもらえることになったのです。そして勤務地として指定された地がヴァム村でした。

伝道師の資格を得たゴツホは神の使途となるべく救済活動をし、ます。労働者はみんな貧しいです。神の使途であるゴツホがそのような人たちを見て何もしないわけにはいきません。自分の手当てから洋服からみんな分け与え乞食のような身なりにもなってしまう。そしてその噂を伝道師学校は聞きつけゴツホを解雇します。

伝道師とは身なりから人々の尊敬を受けるような姿でいなければいけないみたいなことだと思えます。まあ形ばかり気にしてイエスの教えの本質は重要視していなかったのでしょうか。

ゴツホは常に本質を重要視して生きています。だから挫折します。今の世界、特に日本がそうですが表面的なことを大事にし、本質はどうでもいいという風潮は100年前のヨーロッパも同じだったようです。

伝道師までのゴツホを振り返ると常にゴツホは本質と言うところで引っかかり挫折するのです。勉強もそうですし、画商も同じです。当時は、絵と言う存在は特別なもので神や神の世界を現すものだからある意味神聖なもののように扱っていました。そしてそれを取り扱う画廊は特別な商売だったのです。ゴツホは牧師の家に生まれているからそのような特別意識って知らずの内に身に付けていったと考えられます。それゆえ形だけにこだわる絵にも反発を覚えたのかも知れません。伝道師もそのように、形にこだわることに反発を覚えたのでしょうか。

ゴツホは伝道師の資格を剥奪され、どのようにこれから生きて行けばいいのか助言を求めるために70キロも歩いてベルギーの首都

ブリュッセルのピーテルセン師を尋ねた。

実は、ゴツホはこのころから素描を始めている。画家になるか宗教活動をするか悩んでいてその相談もしたかったのだと思う。

ピーテルセン師はキュエムの伝道師フランクをゴツホに紹介してくれ、彼の助手として働けるようにしてくれた。ここに来てやっと今私たちが尋ねたキュエムの村が出てきました。そう、この自然たつぷりのアパートはゴツホが伝道師に挫折して辿りついたアパートだったのです。

ゴツホはこの時期、父親から仕送りをしてもらっています。そしてその後ゴツホ最大のパトロンとなるテオがグーピル商会に働き始めゴツホに仕送りを始めたころでもあります。

ゴツホはこのころから宗教活動から画家に方向を転換しましたが、テオからしてみればただの怠け者にしか見えません。一度ボリナージユにゴツホを訪ね、「パン屋でも肉体労働でもまず生活を安定させてから絵を描けばいいのに」と非難をします。この兄弟は本当に仲が良かったのですがさすがにこのテオの非難にゴツホは落胆したと言うよりかなり怒って、その後10ヶ月、あの有名な書簡は交わしていません。まあテオの言い分のほうが筋は通っていると思うけど、ゴツホはこうと決めたら入り込む性格で、甘えることができる。と甘えてしまう性格なのでしょう。だから人と交わることをいつも望んでいるのですが、激しいがゆえに喧嘩して仲たがいも良くします。

何しろこの私たちが尋ねたキュエムの村が画家ゴツホの出発点だったと思います。もちろんそれまでも絵は描いていたと思いますが画家を意識したのはこの地だったはずですよ。

オランダの3大画家

モンスの駅に電車で来たなら確実にモンスで宿を取るでしょう。

そして時間があれば歩いてあちこち散策をしたかもしれません。しかし私たちは車で、なおかつ欲張りコース、たくさんのゴッホの足跡を尋ねようコースなので、今日はベルギーの首都ブリュッセルまで行きそこで宿を取るつもりです。だから早々にキュエムを離れ次の場所に行く予定。

私はぼた山に興味があつた。五木寛之の『青春の門』には、ぼた山はインパクトが強く描かれている。

石炭くずが積もつてできた山つて想像ができない。ボリナージユにはたくさんのぼた山があると言うので一つでも見たいと思い、もう廃坑になり現在は記念館見なくなつているところがあるみたいだからそこに行こうと言うことになった。

ぼた山、緑が多かったです。黒々とした山を想像していたのに、普通の山です。どこにでもある小高い丘ですね。でも緑の下は黒いからやはりぼた山みたいです。そういえばこのくらいの小高い山、道路を走つているときたくさんあつたなと思ひ直すと、あれみんなぼた山だったんだ。

廃坑には建物があり、何か展示しているような感じではありませんが、休館なんか閉館なのかわりませんが人気を感じられないので早々に立ち去りました。

次にゴッホが伝道師をした村ヴァム村に向かいました。村はすぐ見つけましたがゴッホの家は見つけられません。モニュメントのゴッホ像が道路の中央分離帯にあるのは見つけました。

キュエム村のゴッホの家は改装してこれからお披露目をしようとしているので村人たちも知っていました。ヴァム村のゴッホの家は誰も使っておらず廃屋になっていよう。知っている人が少ないのです。又、中心から外れたところにあるのも分かりづらいよう。

す。でも何とか探しました。

ゴツホが下宿していたときは1階がパン屋さんだったようですが今はもう面影がありません。キユエム村の家より朽ちています。特に、レンガの上に塗ったピンクのペンキが剥がれて来て、みすばらしく泣きたくなるような家でした。

家の中は全滅です。直すのなら内部は全取替えでしょう。

ゴツホの足跡を尋ねる人はあまりいません。ツアーのコースに入っているところは、バスからぞろぞろはありますが、個人でゴツホを尋ねるのはよっぽどの物好きでしょう。そしてこのポリナージユの炭鉱の町にゴツホを訪ねる人はもつといないと思います。

アルル、サン・レミ、オーヴェールはソコソコ行くと思います。

やはりそれらの地はゴツホが画家として激しく生きた地ですし、自殺までのストリーのある地だからです。

又、パリやアムステルダム、ブリュッセル、ハーグ、アントワープなどは、ゴツホとは関係なしに観光に行くところだから、ついでにゴツホの足跡でも見ようかという人は若干いると思います。まあそれらの大都市ではつきりゴツホの足跡が分かるところはパリくらいですが。と言うことで、日本人でヴァムの朽ち果てた家を見たのは数えるほどしかいないと思います。だから、日本からの観光客でここに来る人は皆無だと思えます。ヨーロッパに住んでいてゴツホに関心がある人ならそれなりにいるでしょうが。

そんなところに私たちは立ったのです。すごいと思いませんか。誰もが知っているゴツホだけど、知っているだけで誰も深く入ろうとは思わないので、私のように少しでも入るとこのように感無量になるところに行けるのです。

ここでゴツホの足跡の場所を説明したいと思います。ゴツホはベルギーとオランダの国境近く、オランダの小さな村に生まれ、その後ベルギーフランスと渡り歩きます。もちろんオランダにも住んでいました。イギリスも少しだけ住んでいました。イギリス、フランスは説明しなくても分かると思います。でもオランダ、ベルギー

ってどこ?と思う人もいます。特に女性(笑)。

ベルギーはフランスの隣で、九州よりちよつと小さな国土です。千万人くらいの方が住んでいます。九州が千五百万弱なので似ていますね。

ベルギーで皆さんが思い出すのはチョコレートとワッフルくらいかな。そうそうオードリー・ヘップバーンはベルギーの人です。後は小便小僧だ。

オランダはベルギーよりまだ知っている人も多いと思います。何しろ、江戸時代鎖国していた日本が貿易をしていた国ですからなじみは深いと思います。ベルギーのお隣がオランダです。古い世代の人は柔道のヘーシングは超有名でしたね。今でも格闘技は盛んでK1のピーター・アーツとかアーネスト・ホースの名前を出したらオーオーと言う人もいるでしょう。サッカーの好きな人は小野伸二が行った国です。人物以外では風車、チューリップ、そして土地が海より低いというのが有名です。

ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの3カ国でベネルクス三国と教科書で習いましたよね。でもベルギーのべ、ルクセンブルクのルクスは分かりますが何でオランダがネ何でしょうか。実はオランダはネーデルランドとも呼ばれているのです。ネーデルランドとは低い土地と言う意味です。ベルギーも過去にそう呼ばれている時期がありました。だからベネルクスです。そしてオランダの国土の広さはほぼ九州くらいで人口も少し多い程度です。

オランダの有名人は、現在はスポーツや格闘家かもしれませんが、なんとと言ってもゴッホをはじめ超有名な画家を輩出していることに尽きるでしょう。

まずフェルメールそしてレンブラント、これにゴッホを加えたら最強です。

フェルメールもレンブラントも知らない?そんな人が多いだろうなあ。でも画家で言えば超有名ですから名前だけでもここは覚えてください。もし、フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』が日本の

美術館に貸し出されたら、その1点でフェルメール展を開いても長蛇の列になるくらいです。

レンブラントは重厚な絵を描きます。この人の絵は本当に上手い。代表作は『夜警』『テュルプ博士の解剖学講義』です。これらの絵は本当に有名です。

さて、フランスは説明しなくても分かれますね。国土の広さはオランダの10倍以上あります。人口も六千万人、いわゆる大国です。カンヌやニースのコートダジュール、モンブランのアルプス、それにセーヌ川にエッフェル塔と何でもあります。ゴッホ関連では、パリのモンマルトル、南仏のアルル、サン・レミ、そして最終の地オヴェールです。

パリのオルセー美術館にはゴッホの絵がたくさん飾ってあります。後にも書くと思いますが、ゴッホの絵は、パリのオルセー美術館、アムステルダムゴッホ美術館、アムステルダムから電車を使うと2時間くらいかかるところにあるクレラー・ミュージラー美術館の三つの美術館を見ればほぼOKです。

パリに行くのには飛行機ですね。どのくらい時間がかかるでしょう。直行便なら12時間、乗り継ぎなら色々です。私は朝に出て夕方に着きました。あれ、それだと早いのではと思う人もいるかもしれませんがそれに時差を足します。サマータイムもありますが8時間とを考えてください。サマータイムのときは7時間。

ヨーロッパで肝心なのは緯度です。何しろ南仏で北海道と同じ緯度ですから、それより北はもう日本を離れ樺太まで行くでしょう。これはどういうことかという点と寒いと寒いことではありません。ヨーロッパは地中海気候の影響からか暑いんです。パリより南は東京より暑いんです。だから暑さ寒さのことで緯度の事を持ち出しているのではなく、日の長さのことを緯度で言いたいのです。つまり夏は日が長いと言つことなんです。夜の10時に日が落ちるのですから、これは日本の感覚を完全にマヒさせます。反対に冬は日が短くなると言つことですね。私たちが行ったのは秋の始まりでしたから、逆に日

本とそう変わりませんでした。行く季節によってかなり面白いと言
うことで私は夏至の前後を勧めたいですね。

ブリュッセル

モンスから車でブリュッセルに。ブリュッセルはベルギーの首都です。ゴッホもキュエムで画家を目指しますが、画家を目指すなら本格的に勉強しようとブリュッセルに行くのです。実は、ブリュッセルはゴッホの転換期に良く現れる都市でもあります。信仰の道を目指し伝道師養成学校に通ったのもブリュッセルであったし、こうして画家の勉強をしようと思ったときもブリュッセルに行っている。ゴッホの生まれた地から近い大都市ということもあるのだろう。

ゴッホは一時期ブリュッセルで、本屋で働いていたこともあったが、この本屋も失敗している。

ボリナージユでゴッホが伝道師をあきらめ絵の勉強をするのにブリュッセルを選んだわけはテオの存在も大きいと思う。実はテオは一時期ブリュッセルのグービル商会にいたのである。だからブリュッセルの絵の世界には多少詳しくテオはゴッホにハーグ派の有名な画家ルーロフスを紹介したり、若い画家、アントン・リッター（騎士）・ファン・ラッパルトを紹介する。

ゴッホはラッパルトと友人になり彼のアトリエで絵の勉強をするようになる。

ブリュッセルの宿は私が決めた。実はこの旅の計画を立てているときに日本人が経営している宿泊所はないかと調べ、ブリュッセルにあるというのを突き止めそこに泊まろうと思ったのである。もちろんソウ姉さんに異論はなく、ブリュッセルの宿泊地は決まった。

ただ始めの宿泊地はソウ姉さんが決めたが、これからはその時々で決めていかなければならない。まあソウ姉さんがいるから大丈夫だろう。ソウ姉さんも「地図を買ってあるから大丈夫」と言っていて私に地図を見せてくれるし。で、私が車で地図を見ている。

ソウ姉さんは運転しているから地図があってもほとんど使わない

から意味ないし、妻は始めから地図は拒否しているし、で私が見るしかない。

おい、フランス語？だよ。読めないよ。

地図をジーンとみていると、なんとなく分かってくる。分からないところはソウ姉さんに訊けば教えてくれる。面白かったのは、国道とヨーロッパ道があることだ。ヨーロッパでは、国道は日本の国道、ヨーロッパ道は国道みたいなものなんだろう。ただ国道とヨーロッパ道が重なっているところが多い。つまり標識番号を頼りに道を見つけるのだが、その標識番号がヨーロッパ道の番号と国道の番号があるからそこは気をつけないといけないということである。

私のナビで無事ブリュッセルの日本人経営ホテルに着いた。部屋は2ベッドルーム、でもトイレシャワーは一つの部屋にしか付いていない。その部屋はソウ姉さんに譲った。だから、もちろん私はシャワーはなし、まあ寒かったから私たちの部屋にシャワーがあつたとしても入らなかつただろう。でもトイレは使わなくてはならない。小はいい。問題は大大だ。でも我慢はよくない。朝方そつと出したが「ひろーしさん、おなか壊したの」とソウ姉さん妻に聞いていたそうだ。屁、ぐらいトイレで出しても良いだろう！！

ブリュッセルの市内観光は特別にどこに行きたいというのは無い。せいぜい小便小僧くらいかなと街に出る。

さすがベルギーの首都。中心地で駐車場を探せない。あちこち車を回らせながら何とか駐車場を見つける。車を降り、一応グランプラス広場は絶対見たほうが良いという評判なのでそこを目指すが、小便小僧もグランプラス広場の近くみたいだからちよつど良い。

今回の旅で初都市街探訪。もちろんモンスの街は歩いたが大都市の街はこのブリュッセルが今回の旅では初めてで、小さな街モンスとは又違った趣があり、うきうきする。そして大都市は観光客が多いのもうきうきする原因の一つだ。

歩き始めて直ぐに古い建物を見つける。その横は教会だ。本当にヨーロッパは古い教会が多くて皆大きい。教会が街のシンボルだか

らこそ一番大きいし豪華なのだろうが。

若い観光客や子供を多く見つけることができる。韓国人の若者を見つけ、妻とソウ姉さんが声をかける。声をかけるといつても小僧はどこにあるのと聞くだけなのだが、それでも同国人なのでそれ以外の話もしているようだ。

去年ヨーロッパを旅して感じたのだが、韓国人や中国人の旅人は多く見つけることができる。韓国人は団体ツアー客も多いが、フリー観光を楽しんでいる人も多い。中国人はまだ団体ツアーが多いようで、服装を見るとまだ旅なれていないように感じる。日本人も30年前はこんな感じだったんだろうなあと考えさせるものがある。

ブリュッセルの街を、地図を見ながら歩いていたのだが、どうも方向を反対に見てしまったようで、関係ないところをかなり歩いてしまった。が、関係ないといってもそこは異国の街、それなりの風景を楽しめ間違ったからといってそれほど不快はない。それなりの風景とは窓のベランダに飾ってある花が綺麗だとかというレベルであるけどね。

大きな広場に出たときグランプラス広場だと思ったけどそこはグランプラスの隣にある聖ニコラス教会（聖ニコラス教会ってあちこちにあるよね）の広場で、露天のお店がたくさん並んでいた。

妻は今まで歩いた疲れを忘れ、店を覗き込む。よさそうなネットレスがあつたのでお土産に買おうとしてあちこちの店を覗き込む。皆、似た様なものを売っているからどれでも良いだろうと思うけど声を出しては言わない。旅を楽しむための知恵である。旅に喧嘩はご法度だから。

この広場のはずれに外で食べる大きな屋台みたいなのがあつた。調理場はいちおう建物の中にあるが食事は外という造りで、椅子はなくお客はカウンターがあるだけの場所で立つて食べることになる。ちょうど昼食時だったのでそこで食べることにした。

ベルギーは海産物がきつと名物だと思う。特に貝類がということ。で私たちはカキとムール貝を生で食べた。恥ずかしい話だがムール

貝がベルギーの名物で、こちらの人は小さなバケツ（直径10センチ、高さ20センチくらいかな）にいっぱい入ったムール貝を一人で食べるといふことをそのときは知らなかった。といっても皆が皆一人でそんなにたくさん食べるのかどうかは分からないが、一人で食べているところは目撃した。

生ということとは刺身ということでもある。生は焼いたり煮たりするのは又違った趣があり、それなりに美味しいのだがたくさんは食べられない。というか何となく外国で生は当たるのではないかとちょっと腰が引ける。

妻やソウ姉さんはそんな私の杞憂はお構いなくぱくぱく食べていた。それにヨーロッパで食べているという雰囲気にも喜んでるようだ。

小便小僧とチョコレート

昼食を食べた後いよいよグランプラス広場に。グランプラスは世界遺産です。でも、このような広場はヨーロッパにはたくさんありとりわけ感動するとうものではなかった。このような広場を始めて見る人にとっては感動する広場だと思うし、広場いっぱい花を敷き詰めた頃に見れば感動ものだと思うけど、残念ながら私たちが行った頃は普通の広場で人が多いかなという感想しかもてなかった。なので、そこは直ぐに立ち去り、小便小僧を見に行った。

小便小僧までの道のりの両側ではお土産店がたくさん並んでいる。特にチョコレート。ベルギーのお土産といえばチョコレートでしょう。きつとハワイのマカダミアナッツチョコより世界的に有名だと思います。

箱詰め6個とか10個とかまとめて安く売っている店が多い。当然買いました。バーゲン品みたいなのはたいして美味しくないと思いましたが、やはり本場ベルギー、そのようなバーゲン品のチョコレートでもとても美味しかったです。確か2セットくらい買ったと思うけどもつと買えばよかったと思うくらいでした。

小便小僧はチョコレートを買った後直ぐに見つけました。周りは人ばかりです。別にどうってことない彫像なんだけど有名ということとはこういうことなのでしょう。ここでたくさんさんの写真を撮ったのですが、デジカメラの唯一の欠点、データーがこの辺の写真を壊していました。遠くから撮った1枚しか残っていませんでした。チョコレートの店とか皆消えていました。ソウ姉さんから小便小僧を1枚分けてもらいました。

小便小僧の目の前の喫茶店で一休み。一休み後、またぐランプラス広場に戻ると広場の入り口の隅に灰色の彫像が。

「セヒ、あれスペインで見た人の彫像だよ」と私が言うとセヒは「あー」と声を上げそばによって行き小銭を渡しました。小銭をも

らった彫像は、今までピクリともしなかつたのにいきなり動き出しお礼のポーズをとります。人も集まってきます。最近原宿でもこの人の彫像を見たけどヨーロッパではどこでも見るからポピュラーなものになってきているのだろう。

今日は、暗くなる前にブルージュという街に向かいます。実は、日本人オーナーの宿泊所に泊まったとき、ベルギーで見所はどこですかと尋ねたとき、ブルージュの街だと言い、「そういえば、ブルージュがいい街だとよく聞く」とソウ姉さんも言ったので、急遽ブルージュに行くことに決めたのであった。

ゴツホとは関係ない街だけど、ゴツホにこだわり良いところを見ないというのは、旅を楽しむためにゴツホを利用しているだけなのだから本末転倒になってしまふ。故、ブルージュ行きを決めたのであった。

車に乗りブルージュに向かう途中ゴツホが住んでいたと思われる場所を通ったがそこは電車のガード下あたりだった。

ベルギーは日本人の多くが、なじみがない国だと思えます。だからベルギーといっても先に書いた小便小僧とかチョコレート、ワッフルとかの個別のものにかろうじてなじみがある程度で、首都のブリュッセルを始め街に対してはほとんど知らないところばかりだと思います。だから私たちが向かうブルージュにしてもほとんどの日本人は知らないと思うが（最近観光ツアーは増えているらしい）、ヨーロッパの観光地としてはメジャーな街なのです。

ブルージュは水の都で街の外側が運河で囲まれ、街の中にも何本も運河が走っている。ネーデルランドという低い土地に出来た街だから運河がよく似合う街でもある。また、海の近くにある街で昔は港町として栄えたが、川の底がだんだん浅くなり、大きな船が行き来できなくなってしまうてからは寂れた街となってしまうたらしい。だから死街になってしまったのだが逆に死街となったことで中世のままの街が今でも残っているということでもある。

日本にも城下町があり城の周りにはお堀があるのだが、ヨーロッパ

パの街は町自体が全て城塞の役目をしていたので規模が大きい。が、ほとんどのヨーロッパの街は旧市街と新市街があり、新市街まで入れば大きい。が旧市街だけならそれほどでもないところもある。りだ。

しかしこのブルージュは違う。新市街なんてなく（運河の外にはあると思うけど）全て旧市街なのに大きい。12万人も住んでいるらしい。この大きな街も1日かければ街の主要なところを歩いて回れるが、まあ元気な若者でないと難しいだろう。もちろん私たち夫婦も3分の1くらいしか回れなかった。

ブルージュの街に着いたのは日が暮れ始めていた。急いで宿を探すが皆満室で断られてしまう。さすが人気のある観光地、安い宿はあきらめ多少高い宿で手を打つ。

チエックインを済ませ外に食事に出たときはもう真っ暗である。それでも街の雰囲気は分かる。中世の街だ。15世紀の街だ。良く映画やアニメで出てくる中世の街そのままである。

歩いて数分のところに高い塔がある。それが街のシンボルなのだろうか・・・車で宿を探していたときも高い塔を見つけたが今、目の前の塔とは違う塔だ。街の中に高い塔が二つあるのはよくあるのでこれも二つあるのかなあと思っていた。ところが翌日、高い塔の一つに登ったとき四方に高い塔を見つけることが出来、ブルージュには高い塔がたくさんあることが分かった。

高い塔の一つ、鐘楼とベギン会院は世界遺産でもあります。又街全体も世界遺産なのでブルージュには3つの世界遺産があるということでもあります。

ブルージュの夜は賑やかではなくひっそりとしたものだったので食事をした後、街の散策は明日にまわす事にし、早々に帰ることにした。観光地だから安心だとは思いますが、人通りがほとんどないので遠くにはいけないだろう。次の日に思ったのだがブルージュは若者が訪れる観光地ではないので夜は早めに終わるのだと思う。

次の日の朝は霧に包まれていた。街はまだ眠っている。8時は過

ぎているが店も開かない。街の散策を妻と二人でしていたがホテルの戻ろうとする頃からぼちぼち人や自転車が街に出てきた。お店も数件開き始めた。その開き始めた店の一つにパン屋さんがあったのでそこに入り朝食を買う。嬉しいことにスープもテイクアウトで売っていた。ソウ姉さんの分も買い、ホテルに戻り朝食をいただくとする。ホテルの朝食だと高くつくので旅の知恵である。

ブルージュ

ヨーロッパのパンは美味しいという評判が昔からあるが、今は日本でも美味しいパンがいくらかでも出来ているのもすごい感激はない、が、確かに美味しいパンにめぐり合うときは多い、が、ブルージュのパン屋さんのパンはまあ別にといい味でした。

朝食を終わらせ3人で街に出ると先ほどの静けさはなくなり街が活動し始めていた。皆どこに行くのか分からないが出勤と思われる人たちがせわしく歩いているし、自転車も多い。そして観光客も外に出始めているようだ。年寄りが多い。時々観光客を乗せた馬車が通り抜けていく。石畳にレンガ造りの家、そして馬車、川にかかる石の橋。綺麗なレースを売っている店、これこそヨーロッパ旅行という場所である。

セヒはうれしそうに石畳を歩いている。ソウ姉さんも杖をつきながら街並みを眺めながら歩く。私は写真を撮るところが多く逆に街並みを楽しむゆとりがない。人の表情も良いから思わず写真を撮りたくなるし街並みはどこをとっても絵になるのだ。

30分くらい歩いただろうか、大きいな広場に出、左手には大きな塔が、マルクト広場と鐘楼だ。鐘楼は歩いて登ることが出来る。さすがにソウ姉さんはパス。私もパスしたかったが、ここまできて上らないわけにも行くまい、というよりセヒが上りたいと言っているのに一人で行かす訳にもいかず上る覚悟を決めた。

階段は366段（高さ88メートル）。一段1メートルならばほぼ東京タワーと同じだが一段25センチとしても東京タワーの4分の1はある。結構すごいぞ。

ちなみにわたしの家も上るのに40段近くある。だからその9倍と思えば何とかなるだろうと思った。

またもや、ちなみに1階から2階に上る階段の数は、普通は13段くらいです。だからそれで計算すると28階建てのビルに上るく

らいだ。

28階・・・結構すごい。

初めの100段くらいは元気に上った。階段は螺旋階段で狭く、前からも後ろからも人がひっきりなしに来る。一人で上るには何とかなる広さだが、二人がすれ違ふとなるとお互いが協力し合わなければすれ違えない。だからゆっくり上ると後ろの人に悪い気がしてどうしても速いペースになってしまう。

所々にある窓には20センチくらいの引込みが壁の厚みくらいあるのでそこに腰を降ろして人をやり過ごすということもした。

200段を超えたともうギブアップと言いたくなってきた。300段超えると頭がふらふらしてきて、いきなり3000メートル級の山の頂上に連れてこられたような感じだ。

マジで、本当にギブアップしたかった。もう展望台からの景色などどうでもよかった。でも性なのだろうか、体は悲鳴を上げているのに好奇心のほうがほんの少し強かったようである。

展望台についたとき10分は息を整えるのに要した。頭は相変わらずふらふらしていたが呼吸は楽になったので展望台を歩き景色を楽しんだ。展望台の内部は時計台の内部のようにもなっていて、ぜんまい仕掛けの時計のような感じであった。

ぜんまい仕掛けの時計のようなものは、実は57個のカリヨン（つり鐘）できていて15分ごとに機械仕掛けでオルゴールのように演奏されるのであった。だから鐘楼なんだけどね。

外の景色は薄靄の向こうにびっしりと赤瓦の屋根が並んでいる。ジオラマのようだ。この景色は見なくてはならないだろう。

ソウ姉さんがここまで来てこの景色が見られないのはかわいそうであった。四方全て見ることが出来るのだが大きな塔がいくつも見える。代表的なものは3つだそうだが、何しろたくさん見える。

鐘楼から降りるとマルクト広場には野外喫茶？レストランが見え、そこにソウ姉さんが待っていた。しばし休憩。

昼食には早いがお茶をした後昼食も済ませた。隣のファミリーと

ソウ姉さんが喋りだしたので皆で記念写真を撮った。本当に言葉が通じると旅は楽しくなる。

昼食の後、少し歩くとワツフルを焼いているのを発見。早速買うことにしたが、ミツバチがワツフルの周りを飛び回り一緒に焼かれてしまうのではないかと、はらはら焼きあがるのを待つ。

今回は何とかミツバチと一緒にワツフルの中に入らなかったが、あれは、1日何回かはワツフルの中にミツバチが入っていそうな気がする。

味は、まあこういうところで食べるのだから美味しいということにしておきましょう。

しばらく歩くと小さな船にこぼれるばかりの客を乗せている乗船場が見えた。人がたくさん並んでいたが私たちも並ぶことにした。するとソウ姉さんが係りの人となにやら話している。そして直ぐに私たちは乗船場の1番目に案内された。

「障害者は初めにしてくれるの」ソウ姉さんが得意そうに説明してくれた。待っている人に申し訳ないような、助かったというような感じである。

先頭に回された私たちであったが、この乗船場、結構回転率が良く、次から次に船は来るし、船にたつぷり人が乗るから、私たちが正規に待ったとしてもそれほど待ち時間は変わらなかった様である。

船賃は意外と安く5ユーロくらいだったと思う。安いから人気があるのだろう。家族連れ、夫婦のお客が多いように見える。道を歩いて街を眺めるのと、川から上を眺めるのでは街の様相が違ってくる。そして何より疲れないのが最高である。

船旅は3〜40分くらいだったと思うが、退屈しなかったし、疲れが取れてよい乗り物であった。

さてブルージュを後にすると今度はアントワープである。ブルージュ、アントワープ、アムステルダムはそれぞれ13世紀、14世紀、15世紀と港町で栄えたところが移っていた因縁がある。

つまり初めに栄えた貿易港がブルージュなのである。今は小さな街となってしまうが13世紀にはヨーロッパでも指折りの街だったということ、それが14世紀になるとその主役の座をアントワープに譲り、その後アムステルダムに移っていったということである。その歴史の流れに従い私たちはブルージュを後にアントワープに向かうことにした。

アントワープのルーベンス

ブリュッセルからアントワープは北に45キロの位置にある。つまりブリュッセルからアントワープに行くのなら直ぐ近くだったということでもある。

しかし私たちは北西100キロ程度離れたブルージュに寄り道したので、今度は東に100キロ程度戻る感じでアントワープに向かった。ちょうど直角三角形のような位置関係がこの3都市の位置関係にある。

アントワープを直角三角形の90度のところとして短いほうにブリュッセル、長いほうがブルージュだと想像してください。

アントワープのはずれに着いたのはもう日が暮れていた。泊まるところはイビスです。例のチェーン化したホテルで安全安心安い、高速の出口の近くということなのですが、ヨーロッパの旅のホテルとしてはとても味気がない。

高速道路の出口の近くの景色は、日本でも見ることが出来る景色だ。田舎の広々とした田園風景で、道も大きいという景色なのだが、まあ日本というよりグアムやサイパンの街のはずれのような景色かもしれない。どっちにしろ、魅力ある景色のところではないのです。だから寝るだけです。

アントワープとゴッホの関係は又エネンからパリに移る一時期住んでいたと言う関係です。まあこれだけだと良く分からないと思います。年表を見てもらうと分かりやすいのですがゴッホはモンスの炭鉱で伝道師をした後、画家になるためにブリュッセルに行き本格的な絵の勉強を始めた。ブリュッセルの所で書きました。その後ゴッホはエッテンの両親のところに一度戻ったがハーグに行き絵の勉強をする。そのハーグで売春婦のシーンと同棲をするが皆の反対にあい、又貧困のためシーンと別れいくつかの場所を転々とした後、又エネンに引越していた両親のところに帰ります。

この又エネンでゴッホの代表作「馬鈴薯を食べる人々」を描きます。又エネンではちよつとした問題が起こりゴッホは又エネンを去りアントワープに向かいます。

アントワープでは美術学校にも通います。ヌードデッサンがしたいがために素描クラブに入りもします。でも、この美術学校でも劣等生扱いになりテオのいるパリに旅立ちます。

これ以後ゴッホは二度とふるさとオランダの地を踏むことはなく親とも会うことはありませんでした。

アントワープでもあまり良いことのなかったゴッホですが絵に関してはこのアントワープから変わって行ったと言っても良いでしょう。

ゴッホはルーベンスの色使いをアントワープで勉強します。そして日本の浮世絵を始めて手にしたのもここアントワープでした。

アントワープはルーベンスの街でもあります。私たち日本人には有名な話フランダースの犬はここアントワープが舞台で、主人公の少年ネロがアントウエルペン大聖堂の「キリスト降架」をどうしても見たいと願い、死ぬ間際に見ることが出来た「キリスト降架」の絵の作者がルーベンスです。このアントウエルペンという地名は英語でアントワープとなります。

イビスを出発したのはまだ朝もやが立ち込める時間でした。大きな片側2車線の道路の中央は公園のようになっており、両サイドに木が並木となっていました。そして、中央は芝生のような感じですがあまりにも綺麗なので車を端に寄せ写真を撮りました。

アントワープの旧市街につく頃にはもう日が明るくなっていました。早速アントウエルペン大聖堂に向かおうとしましたが、ルーベンスの絵は他の寺院にもかかってあるとソウ姉さんが道を聞いているときに聞いたのでまずそちらの寺院に行くことにしました。

途中、マネキン人形が喫茶店の前に出ているテーブルにポーズをつけてあるのを見ついたり、色付いた木が綺麗なところで一休みもした。

何でヨーロッパの寺院はこんなに豪華なんだろう。私達が入った寺院は聖パウルス教会というのだが、とても豪華なつくりであるし、壁に飾ってある絵もパリのルーブル美術館に飾ってあるのと同レベルだと思う。そんな凄い絵が壁にズラーと並んであるのだから。

ルーベンスの名前を探し、どの絵がルーベンスなのか探し、何とか見つけたが、今の私の実力ではそれが他の絵と比べどれほど素晴らしいのかは分からなかった。

アントワープにはこんな豪華な教会がいくつもあるのだ。20ぐらいはあると思う。

聖パウルス教会を出、アントウエルペン大聖堂に向かい歩いているとアンティックショップがあり早速皆ではいることに。ソウ姉さんはそこで絵を二つ20ユーロのところを10ユーロに負けさせて買った。

「この絵は捨てちゃうの。何にも価値がないから、この絵の額縁が欲しくて買ったんだから。結構古い額縁だからオークションに出しても一つ20ユーロくらいにはなると思う」と嬉しそうに話してくれた。

後日、ソウ姉さんのアンティックに詳しい友人に聞くと一つ35ユーロにはなるだろうということでした。

アントウエルペン大聖堂にはアンティックショップを出て10分くらいで着いたが、まだ時間が早いみたいで中を見学できるのはお昼過ぎからということであった。それならば先にルーベンスの工房を見に行こうことにした。

ルーベンスはバツロク期を代表する画家で画家の王と呼ばれるほどの画家です。イタリアに学びスペインにも行きましたここアントワープで庇護を受け工房も作り1200点の絵画を残したといわれています。

ルーブルとかプラドに傑作があるよね。でもまだ私の実力では、絶対それらの作品を見たのですが印象にありません。何しろ印象派までの絵画ってほとんど同じに見えてしまうから。この辺が分かる

にはかなり絵画の実力を上げないと無理だと思う。だからルーブルとかプラドよりもオルセーのほうが面白いんだよね。

ルーベンスの工房に向かい歩いているとフルン広場では大きな赤ちゃんの写真が広場一面に敷いてありました。何だろうこれ？

フランダーズの犬

ルーベンス工房まではアントウエルペン大聖堂から歩いて10分くらい、アントワープはブリュッセルと同じく大都市だから人通りも多い。まあ日曜日ということもあるがのんびりと癒されながら歩く場所ではない。でも旅で大都市も意外といける。

ルーベンス工房は大きな貴族の館という感じだが、所詮、大都市の館だから驚くような大きさでもない。小さな美術館程度だろう。実際、邸内の中はルーベンスの絵がたくさん飾られているので小さな美術館ともいえる。

邸内より中庭のほうが何となく落ち着く。私は妻とソウ姉さんより早く邸内を離れ中庭で一休み。天気も良く癒され気分。

昼食はルーベンス工房の近くのレストランで外での食事。メニューはパスタが多い。近くでは子供たちがきゃあきゃあ言いながら遊んでいる。ソウ姉さんがいるから注文も楽だがレストランでどきどきしながら注文できなく寂しい気持ちもある。

アントウエルペン大聖堂には昼食を済まして直ぐに向かった。アントウエルペン大聖堂の前にモニュメントが、何のモニュメントか見てみると日本のトヨタが建造したフランダーズの犬のモニュメントであった。

実はフランダーズの犬は本家アントワープでは有名ではありません。もともとフランダーズの犬はイギリス人女性がアントワープで暮らした経験をもとに作られた物語でイギリスでは出版されたけどアントワープでは出版されていなかったのです（現在は分からない）だから日本人がフランダーズの犬を追ってアントワープで名残を探そうとしても難しいみたいです。大体ミルクを運んでいた犬パトラッシュも実際にミルクを運ぶ犬とは違うみたいです。

アントウエルペン大聖堂は凄いけど、ヨーロッパには凄い教会がたくさんあるのでびっくりするというほどではない。

壁に飾った大きな絵を見ながらルーベンスの絵を探す。すると正面内側の右と左に「キリスト降架」と「キリスト昇架」がそれぞれ飾ってあった。私と妻とソウ姉さんは別々に見学しているので一人でしみじみ眺める。ゴッホもこの絵を見ていたんだ。少年ネロもこの絵を見ながら天国に行つたんだ。と、しばし絵の前のベンチで休んで見ていた。

アントウエルペン大聖堂を出て広場のはずれに行くのとホテルの看板が。中に入りフロントというより受付の婦人に尋ねると昨日、部屋は空いていたし宿泊料金も昨日泊つたところと同じくらいだった。絶対こつちのホテルのほうが、雰囲気があつてよかつたよ。それにこつちに泊まつたらきつとアントウエルペン大聖堂もライトアップされて綺麗だった。たろうし広場は夜遅くまで賑やかだったに違いない。残念。

アントウエルペン大聖堂から海に向かい歩いていく。5分もすれば海に出る。右手の海沿いにステーン城が見えてきた。ステーン城はゴッホも絵を描いている。

海沿いの展望台で一休みしたらアントワープとはお別れだ。そしていよいよゴッホが『馬鈴薯を食べる人々』を描いた又エネンへ。

『馬鈴薯を食べる人々』はゴッホ前半期の最高傑作の絵だと言われている。この絵を描いたことでゴッホも画家としての自信を持つのだが、その後、浮世絵と印象派に出会い皆さんがよく知っている色使いが激しいゴッホの絵を描いていく。

安く大量に売られてしまったゴツホの絵

アントワープを去って又エネンに着いたのは夕方。日がだいぶ傾いている。車を降りると向かいの家の壁にバーンと「馬鈴薯を食べる人々」の大看板が。その大看板を見て、アーゴツホゆかりの街に着いたなあと実感した。

そして又エネンについて一番驚いたことは、ゴツホが住んでいた家に普通の人が住んでいたことである。

窓の奥に灯りと人影が。訪ねて訊いたわけではないが、窓から中を覗いた感じでは明らかに普通の人が普通に暮らしているように見えた。

ヨーロッパは建物も何百年と使っているのが普通だから、多少の手直しはしているだろうがゴツホの時代のゴツホの実家がそのまま存在し、なおかつそこに普通の人が普通に暮らしているのだ。日本では考えられない風景である。

今回の旅で初めに訪れたボルナージュのヴアムの家にも驚いたが、ヴアムは下宿していた家で、又エネンの家はゴツホの実家だった家である。どちらに住みたいかと問われれば誰もがこちらの又エネンの家を選ぶだろう。

私はゴツホゆかりの地をサン・レミ以外主要なところに行ったが、画家ゴツホの地を選ぶとしたら1番オーヴェール2番又エネン3番アルルではないかと思う。

2番にアルルが来ててもよさそうだがオーヴェールを1番にすると画家ゴツホの前半期の集大成の場又エネンが2番にふさわしい感じがする。

日本だとこれだけ歴史的な人物の建物は国が保護しそうだがヨーロッパはそういうことは少ないようだ。オーヴェールのラバー亭にしても一般人が管理しているし。2番に当たるゴツホの家に普通の人が暮らしているのだからうらやましい限りである。

ゴツホは実家に戻ると洗濯室をアトリエとして使えるようになってもらった。その洗濯室は住んでいる家の裏手である。私たちは、ゴツホの家の裏手を見た。小さな路地がある。その路地に入ると、あった・洗濯室が。ここで「馬鈴薯を食べる人々」を描いたのか・ゴツホは又エネンの両親の元に戻ったのはハーグで売春婦のシーンとの同棲に敗れたからである。シーンの話はハーグのときに又書くと思うけど、ゴツホが唯一女性と暮らしたのは後にも先にもこのシーンだけです。だからゴツホが又エネンに戻ったときは失意のどん底状態だったと推測できます。

しかし、絵に関しては、このころのゴツホが一番自分に対して自信を持っていたと思うのです。

あるときサインをしてない絵に対し、「なぜ？」の問いかけに、「いずれ私の絵はサインがなくても誰もが分かるようになるから必要ないので」と答えていたほどだから。

ゴツホが又エネンに滞在したのは1883年12月からほぼ2年の間である。又エネンでは3人の生徒に絵も教えていました。そしてこの地でたくさん絵を描くんだけど、この絵についても大変なエピソードがあります。

ゴツホは又エネンを離れると二度と両親の元には戻っていません。又エネンからアントワープへ、そしてパリへと行くのですが、又エネンまでに描き溜めた絵はテオに送った以外は全部又エネンの母親の元においてきました。

ゴツホの両親は、父親はゴツホが又エネンにいるときに他界（脳卒中）したのですが、母親はゴツホより長生きしました。

両親と最後に暮らした又エネンをゴツホが去るとき、描き溜めた作品を全て置いていってしまうのだが、その作品に全く価値を持ってない家族は翌年ブレダに引っ越した時、ブレダのスフラウエルという大工にゴツホの作品を預け、長い間そのままにしまい存在も忘れてしまう。

スフラウエルはその荷物を長い間保管していたが、ゴツホ死後1

3年経った1903年に、クヴリユールという人がスフラワーエルの店で買い物をしたとき散々値引きをしたので、処分に困っていたゴツホの荷物も一緒に持って行けと言った。

クヴリユールは荷車一杯のその荷物を持って帰った。クヴリユールは百点余りの色鉛筆素描を破棄した。

大きなキャンバスは屑屋に売り、屑屋は処理工場に持って行ってしまい処分されてしまった。

クヴリユールの妻は裸体画を置くことを許さなかったのでそれも破棄された。それでも山のようにゴツホの作品が残っていたのでホテル経営の友人に多数進呈した。ホテルの友人は客の土産としてゴツホの作品を渡した。

クヴリユールは残ったゴツホの作品を安売り市で、1枚5〜10セントで売り出したが数人の農民が買っただけであった。

市の最後の頃マウエンが全てを1グルデンで買った（1グルデンは安宿の1泊料金くらいだったようだ）。

その後、画家で美術評論家のブレンメルとその友人で画家のヒツデ・ネイラントの二人が全て買い取った。

このブレンメルとヒツデ・ネイラントがクレラー＝ミュラー美術館を組織した人物だったのだ。当然このときの作品がクレラー＝ミュラー美術館の所蔵となったのである。

市でゴツホの作品全てを1グルデンで買った後、直ぐに全てをブレンメルとヒツデ・ネイラントが大金を出して買ってくれたのでマウエンはクヴリユールが農民に売ったゴツホの絵を買い戻すようにクヴリユールに言い、クヴリユールは農民から買い戻すことにした。しかしその頃にはうわさが広まっていたので10セントで売った絵を買い戻すのに100グルデン払わなければならなかった。グルデンの単位がよく分からないので正確なことは分からないがおそらく数倍で買い戻したのだと思う。

クヴリユールは、農民から買い戻したゴツホの絵は直ぐにマウエンに全部売ったのだが、その翌日ゴツホが有名な画家だという新聞

記事を読み、数週間後にマウエンに1000グルデンで売ったゴッホの絵が4000グルデンで売れたことを知る。

この後ブラバントではゴッホ騒動が起こり、誰もが何処かにゴッホの絵があるのではないかと探し回ったのである。又、ゴッホの母親は、ゴッホの作品を預けた大工に対して訴えを起こした。

名が売れていなければ大作家の絵もこのように扱われてしまう良い例であると思う。

この例を考えるとゴッホの弟テオの偉大さがよく分かると思う。そのテオが残したゴッホの作品がゴッホ美術館にあり、母親を始め肉親に残し見捨てられたゴッホの絵がクレラー・ミュラー美術館にある。

だからこの両美術館はゴッホ愛好家と称する人たちは絶対に行かなければ行けない美術館だと思う。それにゴッホは浮世絵を知ってから色使いが極端に変わるからその対比を見るためにもクレラー・ミュラー美術館は行かなければ行けない美術館といえるだろう。

ただ、クレラー・ミュラー美術館にはこのときの作品だけではなく、その後も『サン・レミの療養院の庭』や『糸杉と星の見える道』など、パリ以降のゴッホ作品もたくさん手に入れただろうから混同はしないようにしなければいけない。

私はこのときの作品だけを飾ってくれた方が、色使いが変わったパリ以降の絵と対比出来て面白いと思うのだが。

制作年月を確認してみればこのとき（母親たちが捨て去ったときの作品と区別が出来ると思うので確認しながら見ると面白いと思う）。

馬鈴薯を食べる人々

日が傾いてきていたので私たちは急いでゴツホの父親が牧師をしていた教会に向かった。よく分らないんだけど、ヨーロッパは同じキリスト教でも宗派が違つと小さな村でも教会がいくつもあるらしい。

日本のお寺も考えてみれば宗派が違えば、小さな村でもいくつもお寺があるから同じかな。いや、日本の場合は神社もあるしね、確実にヨーロッパよりも多いだろうなあ。

ゴツホの父親の宗派は小さな宗派だつたらしく、村での教会も小さな教会のようだ。ゴツホの家系は聖職者が多かったのだが、ゴツホの父親は小さな村の牧師しか勤めていなかったから、聖職者としては地位が低かつたようだ。

ゴツホの祖父は確か地位の高い人だつたと思つたんだが、そのことを書いてある本がどこかに行つてしまつている。と言うより、沖繩に引越したのでかなりの本を伊豆においてきてしまつているし、持つてきている本も名護の家のダンボールの中にあるので調べようがない。

ネットで「ゴツホの祖父」と検索するとゴツホの父と祖父も牧師だつたと言うのがいくつか載つていただけだつたが、ひとつだけ「ゴツホの祖父は高名な聖職者で・・・」と言うのがあつた。そこをクリックして読んでいくとなんか見覚えがある文章・・・あ、私が昔書いた文章だ。ちよつと読んでいくと発病12年となつてくるから3年位前に書いた文章みたいだつた。そしてちゃんと読むと私がゴツホの旅に行く前に、色々勉強したことが書いてあつた。

ゴツホの父の教会に向かう途中古い家があつたので写真に撮りました。

ゴツホの父親の教会は、ゴツホ実家から歩いて数分のところにあつた。近いね。小さいけどとてもかわいらしい教会だ。信者はきつ

と数十人と思わせるほどの大きさだ。この街のメインの教会はゴッホの実家からゴッホの教会のほうに行かず、反対側のほうにある。

自分の記憶ではオーヴェールの教会よりちよつと大きかったように記憶している（100人から200人くらい入れる教会かな）。

ゴッホの父親の教会にたどり着いてからどんどん日が暮れている。他のところも見たいので急いで移動。先ほど書いた大きな教会のほうに行くと公園がありそこにゴッホの像があつた。

私たちの又エネン滞在はここで日が暮れてジ・エンド。

さて、冒頭に書いた又エネンでのエピソードは「馬鈴薯を食べる人々」からです。ゴッホはこの「馬鈴薯を食べる人々」をとても気に入っていた。そして同じものを何枚か描いたし、石版刷りもした。そしてその石版刷りの下絵をブリュッセルで友達になったアントン・ファン・ラッパルト（1858〜1892）と言うオランダの画家に送つた。すると、彼はこのように言つた。

「あの作品を見て、僕は本当に肝をつぶしたよ。まさか本気であんなものを描いたんじゃないだろうね。なぜ君はあのように物事を表面的に見るのか、僕にはわからない。画面の人たちはたんにポーズを取っているだけで、動きというものがまるでない。右側の男には膝や腹や肺がないし、その腕はなぜ1ヤードも短いのか？なぜ鼻は半分しかないんだ？このような仕事をしながら、君はミレーやプルトンのことを語ろうというのかい？勝手にするがいい。芸術というものは、このように無神経に扱われるには、あまりに崇高なものなのだ」

それに対しゴッホの返信はこうだ。

「ラッパルト、君は何度も僕が人物の形態に注意を払わないと言つたね。君はよく知っているはずだ、どれほど金がなくても僕がモデル代を惜しんだことがなかったことを。僕ほど人物の描写に時間をかけた者はないはずだ。僕の言いたいことは単純だ。アカデミックな正確さをもって人物を描くことや十分な計算のうえにむらなく絵筆を使うなどということは、現代の絵画芸術が緊急に必要として

いることとは何の関係もない。ミケランジェロの人物は、本物に比べて足が長く、腰と大腿部が大きすぎる。アカデミーの画家たちはこのことをどう説明するのか。たとえ僕の人物が実物と違っていても、それは形態により多くの豊かさを与えるためだ。君の発言は、アカデミズムでがちがちなようになった高慢な言葉に満ちている。僕のやり方はもはや君のそれとまったく違ってしまった」

さて、皆さんは「馬鈴薯を食べる人々」を見てどう思いますか。歴史はもちろんゴッホに軍配を上げています。でも、ゴッホの絵としてではなく普通の名もなき画家の絵としてこの「馬鈴薯を食べる人々」を見て、賛辞を贈れるだろうか？

他の人の解説書を読めばほとんどの人は、「馬鈴薯を食べる人々」を賛辞している。やはり評価された絵に対してはほとんどの人が好意的に書く。でも絵を描いている人の話を聞くと、この絵はデッサンがめちゃくちゃだと言うことも聞く。だからゴッホは絵がへたくそだったという人も多かった。

素人目に見ても後ろ向きの少女はなんかおかしいよという感じもある。だからラッパルトの言い分も分かることは分かる。でもね、私は素人だから、始めてこの絵見たとき「いいじゃん」と思っちゃったんだよね。素人だから構図とか気にしないし。ゴッホは表現主義の画家だから、インパクトを狙った絵を目指していたんだと思う。それで見ると確かにインパクトは十分あると思うから狙いは当たっていると思うんだよね。

ゴツホの生まれた地

「馬鈴薯を食べる人々」のもうひとつのエピソード。

ゴツホの父親は大動脈瘤の破裂（脳卒中とも書いてある）でゴツホが又エネンにいるときに急死してしまう。

ゴツホとゴツホの父は対立していたが、それでも父はゴツホを愛していた。だからこそゴツホも一緒に暮らしていたのだと思う。しかしゴツホの父が急死したためゴツホは実家にいづらくなってきた。何しろ何も働かなくて売れない絵を描いているだけなのだから。それもアカデミー的なうまい絵なら家族も納得するだろうが、友達のラッパルトさえけなすような絵なのだから一般人の家族がゴツホの絵を理解するなんてありえなかった。

自分の才能が分かってももらえないと言うのはきついよね。私も才能はないけど自分が一生懸命書いた文章とかを誰も理解してくれないとつらくなるもの。だからゴツホの気持ちってよく分かる。

これからパリ、アルル、サン・レミ、オーヴェールとゴツホは周りに理解されずに最後は周りには期待しなくなるところまで追い詰められていくんだけど、周りに期待しなくなるところなんかよく分かる。

そんなわけでゴツホは父親が亡くなってから家族の理解が得られず（特に二人の妹がうるさかったみたい）ゴツホは近所のカトリック教会の番人の部屋を借り、そこにアトリエを移したんだ。

そんな時「馬鈴薯を食べる人々」のモデルの少女が妊娠してしまっただけで、その相手がゴツホだと疑われる。ゴツホは「私ではない」とはっきり否定するんだけど、村人は信じない。そしてあんな破廉恥の画家のところには誰もモデルになるなど言うお達しが出、ゴツホはモデルが使えなくなったので又エネンを出て行くことになる。

この妊娠した少女の相手は近所の若いカトリックの農夫だったん

だけど、ゴツホはこの農夫をかばって名前は出さなかったようなんだ。でも結局破廉恥画家と言う烙印を押されてしまったから又エネンを離れざる得なくなっただよな。

実はゴツホはこの又エネンで結婚したい相手もい

マユム

ただ、ゴツホは年上（39歳）だったので、双方の家族から反対されて断念している。

写真を見ると結構美人だし、もし結婚してたらゴツホの人生もどうなっただか分からないよね。でも結局ゴツホはアントワープ、パリと行き、絵画も大きく描き方が変わり、画家ゴツホは確立されていくんだけど、人間ゴツホはどんどん破壊されていく。と言うことで又エネンは終わり。

夕方について1時間ぐらいいしか滞在できなかった。本当はこの村で宿泊したかったんだけど宿が見つからず、仕方なく、隣の大きな街アイントホーフエンに行きました。でもここも宿が見つからないへんだった。

まあ何とか見つけて遅い夕食を食べに行ったら、インド料理屋があつて、そこにインド人の女学生がたくさんお客さんとしていて、美人もいたよー。

まあ、あんまり関係ない話だけど、まったく見知らぬ街での食事、ソウ姉さんがいなくなったら、おっかなびっくりでレストラン探していただろうなあ。本当はそれも旅の醍醐味なんだけどね。

夜さまよったときのアイントホーフエンの街、近代都市だった。きつとアイントホーフエンのホテルは早くに出ました。と言うのは、ゴツホ生誕地ズンデルトには午前中に着いた覚えがあるからです。

ズンデルトにつくとまず役場に行きました。この役場、後で気づくんだけどオーヴェールの役場と似ているんです。ゴツホの生誕地と最終地の役場が似ているのは偶然でしょうが、ゴツホにしてみれば、オーヴェールの役場を見てズンデルトを思い出したでしょうね。その後、役場から少しはなれたところ、歩いて1〜2分だったと

思ったけど、ゴツホのミュージアムがありました。ミュージアムと言っても、ゴツホの絵の写真とかポスターが売ってあるだけで、カフェが主体で、奥にビリヤード台があつて、そこで老人がビリヤードやっています。で、ここはこれで終わりでしたね。

早くゴツホの父の教会も見に行かないといけないし、今日は、この後エッテンに行つて、ハーグでとまる予定だからハードスケジュールなんです。

ズンデルトの教会も又エネンと同じく小さかったです。隣にゴツホの彫像があり、なんと私たちが行ったのは秋だったので大きなどんぐりがたくさん落ちてました。で、たくさん拾いました。ゴツホの生家のどんぐりです。お土産にぴったり。まあもらつて喜ぶ人はいませんが、ポットに入れて育てることにしました。

ゴツホはここズンデルトに1853年3月に長男として生まれました。実は前年にも子供が生まれたのですが、生まれてすぐに亡くなってしまったのです（えっと、この辺うら覚えで、すぐだったかどうか確証無し）。そのなくなった子供の名もゴツホ、親からすれば亡くなった月日が同じで生まれたのだから、死んだ子の生まれ変わりだと思つたでしょうね。だから同じ名前にしたのだと思います。¥しかし、後年、ゴツホはその亡くなった同じ名前の子供のお墓を見つけ、ショックを受けるようです。

ゴツホの子供のころはおとなしかったようです。ゴツホは小学校を卒業すると、北ブラバンドのゼーフエンベルヘンの寄宿学校に入学するのですが、父が尋ねてくると抱きついて喜んだそうです。父が来るのを指折り待っていたような子供だったんですね。そして、後年、ゴツホが有名になったとき、この校長はゴツホのこと覚えていなかったそうですから、おとなしかったんだと思います。

ゴツホの家の家政婦は、ゴツホ兄弟で、ゴツホが一番かわいくなかったそうであるから、愛想のない内向的な子供だったのかもしれない。それでも弟のテオとは仲がよく将来お互いに画家になろうと言っていたそうです。だから、子供のころから画家は意識してい

たんだと思います。

このころ描いた素描、9歳とは思えないくらいうまいから、才能は子供のころからあつたんでしょう。

ゴッホは寄宿学校を卒業するとティルブルフの中学校に入学するのだけれど、そこで勉強についていけず、もしくは金銭的な理由で中退した。そしてハーグのグービル商会に入社となります。

ゴツホの狂った恋？

ズンデルトからエッテンまでは10キロしか離れていないのだけれど探すのに手間取ってしまった。

途中、昼食時だったのであらかじめ買っておいたパンをエッテンの近くにある池で食べた。なんか色々な鳥が池にいて、パンをあげたりしたんだけど、久しぶりにあくせくしない時間だった。

ゴツホは、ボリナージュで伝道師をあきらめ、画家になろうとブリュッセルで絵の学校にも通うんだけど（ラツパルトと知り合う）その後両親の住むエッテンに行く。

ゴツホの父は牧師なのだが、今の日本の学校の先生と同じで、ある期間が過ぎたら転任させられていたようだ。

エッテンでのゴツホのエピソードはケイ・フォス・ストリッケル（通称ケー）への求婚だろう。

ケーは子持ちの未亡人、ゴツホとは親戚でもある。この女性が夫を亡くし、失意を癒すためかゴツホの家に来てくる。ゴツホは失意のケーを励まし慰めているうちに恋をしてしまうと言っことなるだろうけど、よくある話だね。相談に乗っている異性を好きになると言うのは恋の始まりとしてはありふれている。ただゴツホのこの恋はゴツホの異常性が示されていると言っ出来事があった。

実は、その出来事も私にすれば普通のことなんだけど、映画なんかではアルルの耳きり事件と並んでゴツホの異常性を強調するために、この話をオーバーに伝えている。

この話の概要はこうだ。

ゴツホはケーにプロポーズをする。驚いたケーは直ぐに実家のアムステルダムに帰ってしまう。これに怒ったのはゴツホの父で、せっかく失意のケーを慰めるために家に呼んだのに、逆にケーを余計悲しませる結果になってしまったと、ゴツホに対して怒る。ゴツホは失意のケーを救うためにもプロポーズしたのに、何で父は聖職者な

のに分かってくれないと二人は大喧嘩してしまう。

このことが因となりクリスマススの日に二人は大喧嘩をしまい、ゴツホはハーグへと行ってしまふ。

さてゴツホの異常性が強調される出来事は、ケーがアムステルダムに去ってしまった後の話で、ゴツホはケーを追いアムステルダムのケーの家を訪問し、伯父ストリツケルに「ケーに会わせてほしい」と懇願するのである。

この場面をアメリカの作家アーヴィング・ストーンは「炎の人ゴツホ」のなかでこのように書いている。

「ケーと話をさせてください」彼は言った。「僕がこの炎に手を当てていられるだけの間でも」彼は手のひらを返して、その甲を炎にあてた。部屋が暗くかげった。手の肉は、蠟燭のススでたちまち黒くなった。数秒もたたないうち、それは燃えるようなまなまし赤身に変わった。フィンセントはしかし、ひるみもしなければ、その眼を伯父からそらしもしなかった。

5秒すぎた。10秒。手の甲の皮膚がふくれはじめた。ストリツケル師の眼は恐怖で飛び出しそうになった。

15秒すぎた。ふくらんだ皮膚は裂けてぱっくりと口をあけたが、腕はふるえさえしなかった。ストリツケル師は激しく身をよじつてやっと我に返った。『この気違いめ！』彼はあらかぎりの声で叫んだ。

牧師はテーブルにのしかかってフィンセントの手の下から蠟燭をひったくり、こぶしで火をたたき消した。

映画も原作が同じなので似たような描写になっている。あ、カークグラス主演のやつね。小説とか映画だからゴツホのキャラクターを確立するために、ゴツホを精神的異常者としたほうがいいと判断したんだろう。そしてこのイメージが一般の人にはゴツホのイメージとなってしまう。

ゴツホは確かに精神的におかしいところがあったかもしれない。でもそれは、現在のうつ病とほとんど同じレベルだったと思う。完

全に精神が破綻しているのではなく、物事がうまく行かないため、激しい感情の持ち主のために起こる感情の噴出しだったんだらうとおもつ。

私も自分自身を照らし合わせると理解できるし、子供っぽい感情を持つ人にとっては、十分理解できる範囲内であると思う。

ゴツホは確かに蝋燭に指をかざしたようであるが、しかしその前にストリツケルは火を消し、「ケーには会わせない」と静かに言ったそうである。そして、ストリツケル夫婦はゴツホを宿まで案内もしているのだ。だから子ずれの親戚の未亡人に恋をしたと言う以外はそれほどエピソードでもない話なのである。ただ私は単純に写真を見て思うのですが、う〜ん。この未亡人に恋をするかなあと、又エネンのマーゴットは美人だったけれど、ケーはね……やはり恋と言うより同情心のほうが大きかったかもしれない。

さて私たちはエツテンでゴツホの痕跡を探したのだけれど、彫像以外は見つけれなかった。もっとちゃんとした調べをして探す元気があればきっと教会は探せたと言つか、きつと見ているのだろうけど、そのときはわかんなかった。

エツテンの街は、又エネンとかズンデルトとは違いちょっと大きな街でした。中心に大きな駅もあるし、駅の前は日本でよく見るような大きなアーケード商店街でした。

妻とかソウ姉さんは、店を覗いては出るの繰り返し、別に買うわけでもなくね。1時間くらい歩いたら、エツテンは終わり、いよいよハーグに。

ハーグ

オランダと言えば首都アムステルダムしか都市は知らない人が多いと思う。しかし、ハーグは行政機関が全てであるので、ある意味オランダの中心地であるのだ。

私は両方の街を訪れてみて、どちらの街が大きいとは判断できなかったが、ハーグの方がおちついていていられるかもしれない。しかし、ゴッホの時代はハーグの方がにぎやかだったような気がする。

ハーグの街は、ゴッホは深いかかわりがある。前回エッテンでクリスマスの日に父と喧嘩したとまで書きましたが、ゴッホはその結果エッテンからハーグに移り住みます。実はゴッホはティルブルフの中学校を中退した後ここハーグのグービル商会に入社している。

グービル商会はパリに本店があり、後にテオがその支店長となり印象派の絵を積極的に売った画廊だが、ゴッホの伯父が共同経営者としてこの会社に影響力を持っていたから、その縁でゴッホもテオも入社できたのだと思う。

ゴッホはこのハーグ時代は熱心な社員だったからハーグの支店長テルステーフとの親交もあり、それを頼りに行ったのだと思う。それにゴッホの母方の従姉の夫アントン・マウフェに絵を習うと言う目的もあったかもしれない。

実はゴッホがエッテンにいたとき、この二人に会いにゴッホはハーグに行ってマウフェに絵を習い、テルステーフには相談に行っているのだ。だからエッテンからハーグに行ったのは当然と言えば当然と言えた。しかし、この頼りとした二人とゴッホはハーグで喧嘩をしてしまう。

アントン・マウフェには1ヶ月ほど絵を習ったが、はじめは素直にその教えを受けていたが、だんだんマウフェの絵にアカデミーを感じ批判が多くなる。そんな時、絵で飯が食いたいゴッホは売り絵を描き、それをアントン・マウフェが激しく非難をし、それ以後絵

を習つのを止めている。そこに感情的な物言いがあつたと推測されるので、それ以後の付き合いは無くなつたが、ゴツホはアントン・マウフェの忠告をもつともだと思ひ、売り絵はすべて破棄した。後にアントン・マウフェが亡くなつたとき、その死を悲しみ「花咲く桃の木」を描きマフエに捧げるとテオに手紙に書いた。ゴツホは何度か絵は習つたが、おそらくゴツホが師として好きだつたのはこのマウフェだけではなかつただろうかと思ふのだが。

マウフェの絵、どこかで見たのだが、どこだか思い出せない。きっと、ヨーロッパのどこかの美術館だと思う。だから、写真を探せば見つけれられるかもしれないと探したが見つけれず。ネットでも探したが見つからなかつた。でも何とかネットで見つけた。

マウフェの絵を見たとき良い絵だと私は思った。情緒的な田舎の素朴な絵を丁寧に描いている。壁に飾りたい絵だ。

おそらくゴツホのこのころの絵とマウフェの絵を、一般の人に見せたらほとんどの人がマウフェの絵のほうが好きだと答えるはずだ。さて、私たちがハーグに着いたのは夕方、例のごとくまず宿探し。結構ないもんだ。安宿にしたいから探すのが大変。やっとの思いで探したところは中心街からほんのちよつと離れたところ。でも、中心街には歩いていけるからOKです。この日はホテルで休むだけ。

実は、ここハーグには有名なフェルメールの「真珠の耳飾りの女」がある。マウリッツハイスマuseumにあるのだが、それは次の日に行くことにした。「真珠の耳飾りの女」はシャープのCMで放送されたからほとんどの人が知っていると思う。今現在、日本では1番人気の絵かもしれない。

ゴツホはこのフェルメールをとて尊敬していたけど、この真珠の耳飾りの女がマウリッツハイスマuseumに入ったのは、1900年代前半、確か1903年のころだとおもつたが、ちよつと資料が見当たらない。何しろゴツホがこの絵を見ていないのは確実である

売春婦シーン

前回アントン・マウフェのことを書きましたが、今回は喧嘩してしまったもう一人、画廊グービル商会の元上司テルステーフのこと。

彼との喧嘩の原因は子ずれで、妊婦で娼婦のシーンとの同棲であった。この同棲はテルステーフだけではなく、ゴツホの家族も反対であったし、ゴツホの理解者テオも反対であった。

テルステーフとゴツホは、かなり二人の間で書簡のやり取りをしていたのだが、相当すごいやり取りをしたのかテルステーフはそれを公表していない。確か、ゴツホの名声が高まったころ、2〜300通あったオランダ時代のゴツホの手紙を、1通を残して全て焼いてしまったと記憶している。

テルステーフはゴツホの絵に対しても批判的だから、シーンのことがなくても喧嘩別れとなっていただろう。

さて、その娼婦シーンだが、ゴツホとシーンの出会いは、シーンのあまりにもみすばらしい生活に同情したゴツホがモデルを頼んだことから始まる。

シーンに何回かモデルを頼んでいると同情心が強まり、特に妊婦と言うことと子供を気にし、同棲が始まる。ゴツホは常にお金では苦労していたが、この時期が最悪だったようだ。

ゴツホはシーンと結婚を考えていたが、そのことを家族に話すとは反対にあうのは分かっていたので、しばらくは話さなかったのだが、いつまでも話さないのはテオに対し義にかけると思っている、手紙にそのことを書いたら、案の定猛反対される。

テオの反対を押し切ってまで結婚すると仕送りは止められるため、結婚まではできずにいた。そして幸せな時間は長く続かなかった。貧困に耐えかねたシーンが再び娼婦に戻ってしまったのだ。本当はシーンと子供たちと生活費が安く住むドレント

地方に引越そうと思っていたが、シーンが娼婦に戻り別れなくてはならなくなったゴツホは一人汽車に乗った。

実はこの旅立ちのとき、シーンと子供たちは駅まで見送りに行ったのだ。シーンの生まれたばかりの子供は（このときはおなかの中の子供は生まれていない）、ゴツホのひざに乗ると言っただけをこねていたらしい。その子にしてみれば父と同じなのだから当然だろう。しかし、分かれなければならず、ゴツホは生涯このことは傷として残ったと思う。しばらくはその怒りをテオにぶつけていた。

さて、話は私たちのハーグの翌日。朝から天気がよく、元気に街に向かった。目的地は「フェルメールの「真珠の耳飾りの女」のあるマウリッツハイス美術館」。

ガイドを見ると「真珠の耳飾りをつける女」と並んで、同じフェルメールが描いた、「デルフトの風景」も有名らしい。

マウリッツハイス美術館まで行くのに街を歩いていくのだが、木々の紅葉と街がマッチしていて綺麗だ。途中、古着屋があり、よさそうなコートが1万円以下だったので買った。しかし、あまりにも重いコートのため帰国後、人にあげてしまった。

マウリッツハイス美術館に入り「真珠の耳飾りをつける女」と「デフォルトの風景」を見たが、まずこのレンブラントの真珠の耳飾りは映画も見たし、絵もよく見ていたので、「ウ〜んそうか」と言う感じだったが、「デルフトの風景」はひきつけられる絵だった。

フェルメールのガイド本を読むと、フェルメールは現存している作品は33〜36点しかない。この33〜36点と言う数の少なさと、なんで数がはっきりしないんだと言うところに目をつけた人、鋭い。

現在はオークションで印象派の絵が、人気が高いが、20世紀の初頭はフェルメールの人気が高く（ある意味今でもだが）、贋作が多く作られたのだ。中でもメーヘレンの贋作は有名で、

彼はつかまつた後たくさん贋作を描いたことを告白した。

その中で「エマオのキリスト」は有名で、1938年にロツテルダムのボイマンス美術館が当時オランダ人画家では最高額で購入したのだ。

メーヘレンはその「エマオのキリスト」も自分が描いたと告白したんだけど、あまりにも素晴らしいできに、美術館はメーヘレンの告白を信用しなかったというわけで、今でもフェルメールの作品として飾っているらしい。まあ、高いお金をだして手に入れているしね。

オランダ人画家は有名な画家が多い。ビックスリーはレンブラント、フェルメール、ゴッホだろう。ゴッホのミレー好きは有名だが、レンブラントの絵にも心酔していた。が、後には、フェルメールに一番心酔したようだ。

フェルメールはデルフトに生涯のほとんどを住んでいたように、デルフトはハーグから10キロくらいしか離れていない場所であった。

マウリッツハイス美術館を出た私たちは、フェルメールの街デルフトに行こうと言うことになった。デルフトの行き方を訊いて回ると、車で行くととても混んでいるので路面電車で行くのが良いと教えてもらった。で、路面電車で行きました。

着いてから、川辺の店でパンを買って昼食。昼食を食べ、フェルメールの「デルフトの風景」の場所に行きたいと、行きかう人に尋ねたが、みんな知らないと言う。ここはフェルメールの街ではないのかと不可解な思いもしたが、まったく予備知識のない街を歩くのも面白いもので、お年寄りが集まって話している場面も、おー異国だあという感じであった。

結局、お土産屋に聞いたら「デルフトの風景」の場所が分かりました。なんとなく絵の名残もあるけど、そっくり残っている感じではなかったです。でも、結果を求めるのではなく過程を求める旅だったので楽しかったです。

デルフトから戻ると車でハーグから西にあるスヘーヴェニンゲンの海岸に向かった。ハーグから一直線の道の突き当りがスヘーヴェニンゲンで、20分くらい車でドライブしたと思う。

ここにはゴツホもよくシーンの家族と来ていたようである。

「大きな海岸だなあ」くらいの印象しか私は感じなかったが、ゴツホとシーンの家族はこの海岸で楽しんだのだと思う。車はそのままアムステルダムに向かう。

アムステルダムゴッホ美術館

アムステルダムに着いたのはもう日が暮れていた。日が暮れてからのホテル探しはとて大変である。しかし、今日の宿は昨日私がネットで予約をしておいた。ヨーロッパのホテルは大体ネットが繋がる。ただ無条件で繋がるのではなく、カード支払いのため、色々記入しないと繋がらない。ただし自分のパソコンは持っていないと、貸し出しは小さなホテルでは少ないと思う。

記入欄はフランス語とかドイツ語、オランダ語。英語でも難しいのに他の言葉はまったく分からない。でも、きつとこういうのを入れるんだらうと適当に入れていくと、まあまあ記入できる。しかし最後がまったく分からずソウ姉さんに聞く。

ソウ姉さんは、フランス語はできる。英語もまあまあでもドイツ語とかオランダ語はできない。でもフランス語ができれば、多少、見当はつくようでも無事記入。

エーなんてそんなこと記入するのというようなのだったので、ソウ姉さんに訊かなければ絶対分からなかった。そのなんでーという項目は、今はもう忘れてしまった。他の項目欄は見当をつけて書いたのが当たっていた。もし、ソウ姉さんがいなくても、フロントで訊けば分かったと思う。

ネットをつなげると検索にyahooと入れればページのホームページに飛ぶから、後はそこからヤフーの海外ホテルで探せばOK。

海外ホテルの予約はヤフーが手数料を取らないのでよく利用した。又、スカイプを使えば日本との電話ができ、日本の電話はスカイプを利用した。

ヨーロッパに行った人は分かると思うけど、言葉のできない人がヨーロッパから日本に電話をするのはかなり難しい。ホテルからの電話代は高いし、公衆電話はかけ方が難しい。携帯の海外が繋がるのがあるでしょうと思う人もいると思いますが、ゴッホの旅、初回に書いたと思います。パリの空港以外繋がりませんでした。あ、たまにどこかの都市で繋がる時はありましたが、ものすごく限定地域のみですから、ほとんど繋がらなかったです。今はだいぶ改善されたようで、ドコモの話ではほとんどのところで繋がるということです。

道のナビはする、ホテルの予約は取ると言う私の活躍に、ソウ姉さんはもうガイド料をくれとは冗談でも言わなくなりました。

アムステルダムでは2泊の予定。もし、もつと泊まりたかったら、ネットで探せばいいし、昼間よさそうなところを探しても良い。とりあえず、ゴッホ美術館のそばと、市内の中心に近いところを選んだ。

ゴッホ美術館は中心よりはなれたところにあり、そこはかなり静かなところであった。私は発病前にアムステルダムで泊まったことがあるのだが、そこは川沿いの安宿だったが、いかにもヨーロッパの宿と言う感じで、一流ホテルより印象に残った。だから今回もそれを期待したのだが、案内されたのは、コンドミニウムのような感じのところ。リゾート地にあるようなコンドミニウムではなく、アパートの一室と言う感じであり、場所も静かであったが回りに何もなさそうなところであったので、ちよつとがっかりした。

アパートのようなホテルも部屋に入るのに階段があり、思い荷物を運ぶのに苦労した。まあ明日のホテルに期待しよう、いちおう夕食に外に出た。すると、少し歩い

て道路に出た向こう側は明かりがぱあと点いて賑やかそうであった。行ってみるとそこはブランド街であった。有名ブランド店がほとんどある。

アムステルダム中心から外れたところだが、美術館とあるのだから、ここは高級地なのだろう。当然、女性二人はウィンドショッピング。

ゴッホとアムステルダムの関係は24歳のとき牧師になりたくて、海軍中将のヤン伯父の家に寄宿して、神学大学受験の勉強をしていたことと、美術館に通ったことである。

ゴッホの親戚は結構出世した人が多く、ヤン伯父はそれ際たるものであった。ゴッホの自我が強かったのも、この親戚たちの影響があつたかもしれない。

ゴッホは結局、神学大学入学は断念して伝道師としてボリナージュに行き、伝道師にも挫折して画家を目指すためにブリュッセルに行き絵を習い、アカデミーの教えに反発し、やめて両親の住むエッテンに行き、子持ちの未亡人ケーとの恋愛騒動を起こし、父親と喧嘩別れをしハーグに行き、シーンと同棲し、同棲にも破れ、ドレンテに行つてから再び両親の又エネンに行き、「馬鈴薯を食べる人々」を描き、父親が亡くなり、「馬鈴薯を食べる人々」のモデルが妊娠をし、その相手がゴッホだと疑いをかけられ、モデルをする農民がいなくなり、アントワープに行き、再び絵を習うが、アカデミーの教えに反発し、やめてパリに向かう。

この文章は、ゴッホの旅をメインに書いてるから、ゴッホの軌跡がごちゃごちゃになって書いてしまっている。軌跡どおりに書くと同じような感じである。

そしてゴッホの旅としては、この後、クレラーミュラー美術館に行くが、ここはゴッホの軌跡としては直接関

係ない。

最後にオーヴェールにも行くが、オーヴェールはゴッホ最終の地であるから、今回の流れから一気に飛んでしまふ。だからゴッホの軌跡を追う旅としては、ある意味アムステルダムが最終地であった。でも、結果的に、ゴッホが暮らしていたアムステルダムの家は時間がなくて探さなかった。ただ美術館を回っただけに留まってしまった。でもアムステルダムはそれでいいと思う。ここは、大都市だから、ゴッホだけに拘るより他のものに時間をかけたほうが、正解と言うこともあるから。

アムステルダム2日目

朝から雨が降っている。しとしと雨だが、やっぱり気がめいる。気がめいっても、今日のスケジュールはいつぱい。

ゴッホ美術館は早く行かないと行列ができているそうなので早めにホテルを出る。

ホテルからぎりぎり歩いていける距離にゴッホ美術館はある。タクシーを使ってもいいのだが雨の中を歩いていく。

ゴッホ美術館に着くとやはり列ができていた。私たちも並ぶ。どのくらいまったかちょっと記憶が薄れてしまったが20分くらいだと思う。

ゴッホ美術館は写真撮影が駄目であった。15年前に行ったとき私は写真撮影したのに、今はできないのですかと訊いたら、昔から禁止だったという答え。ウーくん、確かに15年前は力のあるひとと一緒にだったので、地下にある保管質で飾られていない浮世絵とか見せてもらい、その流れで写真撮影も館内に入って撮影したけど、あれって特別だったんだ。

それにしても15年前に比べ、ゴッホ美術館のスタッフ、高慢ちきになっていた。15年前はもっと親しみやすかったのに。あの色々説明してくれた人の名刺、ちゃんと保管して置けばよかった。後で聞いたのだが、確かにゴッホ美術館は、昔は良かったそうで、近年、人気が出たために、鼻高々になってきているらしい。そういえば、15年前にきたとき、行列なんてできていなかったし、館内もあまり人がいなかったような気がする。

仕方がないので館内の外と、館内にあるレストランで写真を撮りました。なんかスタッフの対応が悪かったので、むしろくしゃしなから館内を見て回つたらしく、中がどうなっていたかほとんど忘れていきます。まだ、15年前の記憶のほうがかほとんど忘れなければ記憶も戻るんだけど、撮っちゃあいけないからねえ。

ゴッホ美術館を出ると近くに、国立美術館がある。近くまで歩いて行くとレンブラントの垂れ幕が……何が書いてあるか分からないが、何しろレンブラントのすごいがあるんだろう。

私のオランダの画家のベストスリー、ゴッホにフェルメールそしてレンブラント。ここで話は脱線するが、ミクシーにコミュがあつて、そこで名前を入れて検索するとその名前のコミュが分かるんだけど、レンブラントと入れると2476人参加しているコミュがある。

ゴッホだと4294人。へー結構いるんだとおもうでしょ。でもフェルメールは10583人もいるの。面白いから、有名な画家のコミュを検索してみると、モネ7811人、ピカソ5482人、ゴッディン8人、レオナルド・ダ・ヴィンチ7275人、ルノアール595人、ドガ1043人、セザンヌ596人、ミケランジェロ1286人、ミレー904人、となりました。なんとなく画家の人気度が分かるでしょ。

だからフェルメールって超人気画家で、レンブラントも結構知られている人気画家だということなんです。ということで、レンブラントも人気画家だということで、国立美術館に入りました。

実はこの国立美術館とゴッホに関してひとつの話があります。

ゴッホが又エネンにいるとき、弟子ケルセーマーケルスを連れてこの国立美術館に来たことがあるんです。

ゴッホはレンブラントの『ユダヤの花嫁』の前に立ちつくして動こうともしなかった。ケルセーマーケルスが「次の場所に行きましよう」と言ったら、ゴッホは「もし二週間この絵の前に居続ければいいものなら、僕は自分の命の十年分を差し出してもいいと思っているんです」とまで言ったんだよ。凄いでしょ。

でも、私たちはこのときレンブラントって言っても名前とせいぜい「夜警」くらいしか知らなくて、「ユダヤの花嫁」を見たんだろうけど覚えていません。そんなのばっかりです。だから美術館って勉強しないで行くと、楽しみがそれだけ分からないで終わってしま

うんだよね。

さて国立美術館に入ったら、バーンと「夜警」がありました。おそらくレンブラントで一番有名な絵です。でもここにはフェルメールの「牛乳を注ぐ女」もあるんです。この国立美術館にはレンブラントが20点、フェルメールが4点あるそうです。今確かめると、この美術館ってかなり良い作品がたくさんあったんだなあ。

アンネの部屋

国立美術館を出たら周りを少し歩いた。するとギャラリーがあり、そのギャラリー、レンブラントを置いてあった。素描だったけどすごかった。でも価格は忘れてしまった。

レンブラント以外にも、そのギャラリー、モンゴルの画家の作品がたくさん置いてあり、聞いてみると、来週からこの画家の個展をするという。値段を聞いてみると60万〜200万円くらいだそう。それくらい値段だと思ったけど当たっていた。有名になるとは思えないけどいい絵だった。

ギャラリーを出た後もぶらぶら歩き。ガラス工芸作品が芸術的できれいだった。

今日の宿泊は町の中心のほうでアンネの部屋の近く。

アムステルダムの中心地はうるさい。クラクションの音に自転車がが多い。中国と同じくらい自転車がが多いのではないかと思う。それにスピードを出す自転車がが多いし、自転車がえばっている。車に文句を言う自転車運転者もいる。

ホテルは大きな道沿い、車を道路端に止めるのが大変である。何週か回りやつの思いで車を止めホテルのブザーをピンポン。ホテルというより普通のアパートのような造り。

ピンポンからしばらくしてドアが開いた。びっくりした。ドアの向こうは急坂の階段しかない。どうもフロントはこの急階段を上がったところにあるようだ。重い荷物を持って上がることは不可能。それを一生懸命説明すると、相手は納得したようで誰かを呼んでくれた。その誰かの男性、荷物を運んでくれました。こちらに来て初めて感謝のチップをあげました。

ソウ姉さんは1回上がるともう帰るまで降りられないと思い、道路で待っていてもらい、私とセヒがふうふう言いながらフロントに行きチケットイン。

なんと部屋は最上階。ふざけんじゃあねえ。ここまで来ると怒るより笑ってしまう。でも窓からの景色はきれいだった。

ソウ姉さんが待っているので休まず直ぐに道路に。車に乗り目指すはアンネの部屋。歩いていてもいける距離なのだが、車をいつまでも道路においていけないので車で行く。

「アンネの日記」は有名である。アンネは作家になりたくて日記を書いていたようで、その願いは死と引き換えにかなった。

ルワンダの虐殺を書いた「生かされて」も壮絶な内容だった。民族争いや宗教争いは、女性や子供まで殺し根絶やしにしようとするから悲惨である。ヒットラーはゲルマン（アーリア人）民族の優位性を上げユダヤ人を根絶やしにしようとしたが、ユダヤ人とはエルサレムに住む民族ではなく宗教で作られた民族だったので、血は関係なかったから、アーリア人と区別することも意味無いように思うのだが、無知と独裁は恐ろしいということだろう。

そういえば印象派の絵はヒットラーからすると退廃画ということ、各国から略奪した印象派の名画はうっぱらっていたようだ。でも結構ねこばばしたナチス高官もいただろうから、それが今も騒がれているナチスの略奪品名画なんだろうなあ。確かナチスの略奪品の名画を買ったあと、それが略奪品だと分かったら無償で返さないと駄目なんだよね。

アンネの住んでいた部屋は思ったより広かったが、そこにふた家族となるとやっぱりせまい。アンネの部屋は入り口とかそのままにしてあるようで、とてもリアルな空間に感じた。ある意味、名画鑑賞もいいけど、このような歴史に触れるところに行くのもとても貴重に思う。オーヴェールのゴッホの部屋に行ったときも、その部屋の狭さと暗さに驚き、名画以上の感傷を受けた。

クレラーミユラー美術館

アムステルダムには3泊する予定だったが、2泊で次の予定地クレラーミユラー美術館に行くことにした。

15年前にオランダに来たときはアムステルダムが面白く、ここで3泊はしたいと思ったんだけど、なんか、アムステルダムに疲れてしまい、違うところに予定を入れようということになった。

次の朝、またもや例の男に荷物を運んでもらいチップを弾んだ。今日は、またもやしとすと雨。

クレラーミユラー美術館までは、アムステルダムから車で1時間ちよつと(だったけかな)。

クレラーミユラー美術館は、オランダ最大の国立公園、クレデー・ホーヘ・フェルウェ国立公園の中にオッテルローの森があり、その森の中にあります。公園なのかなと思っていたが、もう森森森というところでした。でも、道はちゃんとしているから車だと楽である。途中、休憩所みたいところに自転車がたくさん置いてあるところが3箇所くらいあった。

クレラーミユラー美術館の駐車場のところも自転車がたくさん置いてあり、無料で乗れるようだった。つまり森の中は自転車で回りましたよということなんだろう。

駐車場から美術館入り口までは少し歩くが、自然の中を歩くので良い気分である。

館内に入ると、子供や模写をする人がたくさんいた。自然の中のびのびしている感じで、ゴッホ美術館に比べると、とてもいい感じである。後で聞いたのだが、昔はゴッホ美術館がのびのびしていて、クレラーミユラー美術館がぎすぎすしていたらしい。

これも忘れてしまったから確証は無いのだが、元々夫人(クレラーミユラーの夫人かな)が若いころゴッホを好きで、ゴッホの絵を収集していたらしい。まったく忘れてしまい確証はない話でネット

に書いてあるかなと見たけど出ていなかった。

その婦人が後に金持ちのクレラーミユラーと結婚して、この美術館の前身となる作品を集めたんだったと思うんだが。まあ、何しろゴッホ美術館より十分楽しめる美術館でした。珍しい作品もあったしね。ゴッホの裸婦とかね。

クレラーミユラー美術館の近くに、映画「遠すぎた橋」のモデルの橋があるらしいのだが、もうフランスに戻るうということになった。

一気にパリ、もしくはオーヴェーに行こうと思ったが、時間的に無理で、途中の知らない街で宿を取った。ここまで来るとかなり身体も精神も疲れてきていた。

ゴッホとテオの墓

ヨーロッパの国と国を行き来するのは意外と短時間でいけるのだが、そうはいつてもオランダからフランスはかなり時間がかかり、オーヴェールに着いたのは午後3時ころだと思った。

オーヴェールはパリから車で1時間くらいのところにあり、鉄道はパリのサン・ラザール駅からゴッホの時代は1時間くらいで行けたようだ。だからパリから気楽にいける避暑地のような存在だった。日帰り客も多かったようだ。又、車で行くのにも、結構迷うようなところにある。私たちだけかもしれないが、苦勞しながらやっとなおもいでオーヴェールに着きました。

まずはオーヴェールの教会に。ゴッホは、教会はいくつも描いているが、やはりここオーヴェールの教会が有名だろう。

最初にオーヴェールの教会を見たとき、あ、ゴッホの絵と同じだと思った。なんか独特の雰囲気があり、絵画のような建物であった。教会に入るには裏からで、誰でも入れるようだったので、当然入った。外観がやっぱりいい。教会の入り口に看板があり、そこにゴッホの描いた「オーヴェールの教会」が描いてあった。いちおう絵と同じように人を配して写真を撮りました。

車をゴッホの教会の近くに置き、歩いて街から外れたところに行くことにした。なぜならゴッホとテオのお墓が教会から近くにあるようだからだ。車2台が通れる程度の曲がりくねった細い道を登ると開けた世界が。今はもう収穫が終わっているのだろうが、きつと麦畑だ。

少し歩くと又ゴッホが描いた看板がある。「雨の麦畑」だ。きつと看板の先がモデルとなった風景なんだろうけど。面影がないぞ。麦畑が見えないし。看板側でないほうが刈り取った後の麦畑があるけど……。

雨の麦畑の先が墓地である。墓地に入れば直ぐにゴッホとテオの

墓が見つかると思ったが見つからない。案内看板があるとか、豪華な墓だと思っていたから直ぐ見つかると思ったんだけど、見つからない。あんまり人もいかなかったんだけど、それでも数人はいたので聞いてみる。奥のほうにあるそう。何とか探し当てたところは、入り口からは1番奥にあたる面であり、右側のほうにあった。小さくて質素な墓だ。大きくて立派な墓は歩いてきた途中にいくつもあったが、ゴツホとテオの墓は小さくて質素である。なんともいえない気持ちになる。

実は、始めにはここにはゴツホの墓しかなかったが、ゴツホが亡くなって24年後に妻のヨーがここにテオの墓を移設したらしい。24年の歳月で何が起こったんだろうか。

オランダのユトレヒトはオランダの真ん中にあり、アムステルダムから45分のところにある。

ヨーはテオが亡くなってから、オランダに確か戻ったと思うから、墓をそこにしたのはそれだと思うが……。

墓地を出るとツアー客の団体がぞろぞろやってきた。私たちはちよとでた後だから入れ違いだっただが、ここオーヴェールは結構ツアー客の団体があるようだ。滞在中何組も出会ったから。パリからのツアーがあるらしい。確かに日本の団体さんも見た記憶がある。でもここは、フリーで来ないと面白くないところだよなーと、後で思った。

墓地から道と反対方向の遠くに又看板が見える。そこも何かしらの絵をゴツホが描いたのだろうと思ひ、歩いていく。なんとその場所は、「鳥の群飛ぶ麦畑」の場所だった。

この絵のインパクトは、ゴツホの自殺はこの絵を描いた後、この麦畑で拳銃を撃ったという勘違いを起こしてしまうほどの絵に見えます。実はこの絵、ゴツホの最後の絵だと1900年代の始めにいわれていたのですが、この絵と思われることをゴツホはテオ宛に7月10日ごろの手紙に書いてあるので、ゴツホが死んだのが7月29日だから、普通に考えて最後の作品ではないだろう。しかし、7

月6日にパリのテオの自宅に訪ねているから、その後を描いたとしたら、自殺、もしくは心の葛藤を描いたものであるのかもしれない。ゴッホが自殺した場所というのは（確定ではないが）、麦畑から少し歩いた街のはずれあたりで、劇的な場所というより、普通の家の近くという場所であった。

先に7月10日にテオに会いにゴッホはパリに行ったと書いたが、テオの子供が生まれたことと、テオが仕事で悩んでいたことで行ったらしい。

テオは印象派の絵を店の方針から外れても売っていたので、店の上層部とうまく行っていなかった。そこで独立しようかと悩んでいた。

独立しても印象派の絵を売って暮らしていけるかどうか、きっとヨーと色々激論していたんだろうと予想できる。それにゴッホはどのように加わって話したのか、今となっては分かりようもないが、テオの家をでた後、ポントワーズで拳銃を買ったのだから、そのテオの家に行ったことが自殺の原因と考えるのが自然だろう。

ちなみに拳銃をどこで買ったかという話がいくつかのゴッホの本でミステリーとして載っていたが、これは、ゴッホの死後、警察の調査でポントワーズの店で買ったことが証明されている。店の名前もルーフと調べがっているのだ。

日本のゴッホのことを書いたものには、初歩的なことを判らずに書いているものも多いから気をつけなくてはならない。

バルビゾン派のドーバーII

「鳥の群飛ぶ麦畑」の場所から墓地のほうに戻らず、教会から墓地に繋がっている道と平行に走っている舗装されていない小道を使い、街に戻った。

下り坂を下りきると教会に行く道に出る。そこを教会に向かわず街のほうに歩いていくと又看板が。「オーヴェールの村の道と階段」だ。オーヴェールの街にはこのような看板が30以上あり、ゴッホの絵のモデルとなった場所にそのゴッホの絵が描いてある看板がある。これはとても便利だ。街全体がゴッホ美術館となっているようでもある。

はつきり言って、ゴッホ作品を全て知っているわけではない。というより、主要作品しか知らないから、オーヴェールに行っても、教会と墓地、ラバー亭くらいしか行くところを見つけれなかったが、このようにされていると、適当に散歩しているだけでゴッホゆかりの地がわかる。

大体「オーヴェールの村の道と階段」だって、この文章を書いているときに、その題名を知ったわけで、そのときはこの絵は階段の上の家が、何かしらのゴッホと縁のある家だと勘違いしてた。階段のほうがメインだったんだな。

「オーヴェールの村の道と階段」を少し行くとラバー亭の裏に出た。ゴッホはこのラバー亭に下宿していた。

ゴッホがサン・レミからオーヴェールに引越したのはサン・レミの病院代を含めた生活費が多くかかることと、弟テオの近くに住みたかった理由からだ。

医師ガツシュはピサロが紹介したといわれている。ピサロは印象派の画家としてはそれほど有名ではないが、人は良かったように、色々な画家と付き合いがある。ゴッホもピサロおじさんといつて親しんでいたようだ。ピサロはセザンヌとも一緒に住んでいた

たことがあり、そのセザンヌもオーヴェールで暮らしたことがあるようである。そのピサロから勧められたオーヴェールだからこそゴッホも引越したのかもしれない。

医師ガツシユから紹介されたホテルは1日6フランと高かったため、ゴッホは安い宿を探し1日3・5フランのラヴー亭を見つけたのだ。

ラヴー亭の家族はゴッホに優しく接してくれたようである。ゴッホが自殺した後しばらくその部屋は借り手がいなかったようだ。まあ自殺したのだから当然だろう。

そして売り家となり、買ったオーナーはなんかちゃんとした使い方をしなかったようで（この辺はちょっと忘れていきます。ネットではそこまで調べられないし、書いてあった本見つけられないし）、その後又売り出されて確か数十年前、私が買おうとおもっても買える時代だったと記憶してるんだけど・・・そのオーナーが改築して今の博物館とレストランになったようだ。

ラヴー亭を後にして、街の中心を走る道路に出ると目の前に役場が。この役場は前にも書いたがゴッホの生誕地のズンデルトの役場とそっくりである。ラヴー亭前の役場をゴッホは毎日目にしていたと思う。ゴッホは後年いつもふるさとを懐かしがっていたから、この役場に何かしらの思いを持っていただろうなあ。

メイン道路を駅のほうに向かって歩くと公園があった。そこにゴッホの彫像が。ザッキン作の彫像だ。この公園の名前もゴッホ公園という。

ザッキンはエコルー・ド・パリの画家でピカソとか藤田嗣治と友人だったそうで、特に藤田嗣治は結婚の証人にもなっている。その関係からか、親日家としても有名だそう。

ゴッホ美術館を過ぎると又看板が。「ドービニの庭」だ。ドービニってだれ??? そのときはドービニが画家とは知っていた。ガイド本でもドービニが暮らしていたと出てるしね。でもドービニって誰??? 最近知りました。バルビゾンの7星と呼ばれてい

たらしい。つまりゴッホの時代では長有名人だった。画家のあこがれの存在だったと思う。

ゴッホの時代はアカデミーの絵が支配していたが、バルビゾン派の絵も人気があり、特にテオの店ではバルビゾンのカラーの版画を多く売っていたようだ。

ゴッホはこの絵を描きながら何を思ったのだろうか。特にこの絵を描いたのが「鳥の群飛ぶ麦畑」と同じところで、7月10日以降で、つまり自殺を考えていた時期なのだ。

栄光に包まれているドービニと自分との対比。現在ではドービニの名前を知っている人は少なく、ゴッホの名前を知らない人はいないというのに。しかし、ゴッホがこの絵を描いていたときは、未来は分からなかったのだから、悔しかったか、悲しかったか。それとも違う感情があったのか・・・。

でも、私たちがドービニの庭にいたときはそんなことも知らなかったなので、有名な画家なのかなあ、くらいにしか思わなかった。ドービニの家から離れると駅があり、今日はオーヴェールで泊まろうということにして、駅に私と妻を残し、ソウ姉さんが宿を探しに行った。

ゴッホ研究科の佐々木さんと偶然会う

ソウ姉さんが戻ってくると街の中心地にあるホテルは満杯だけど線路を越えたところにあいているところがあるという。日が暮れるのまでもう直ぐなので急いでホテルを探しに。

住宅街を迷いながら走ると前に東洋人がいる。ソウ姉さんがホテルの場所を車の窓から顔を出して聞くと相手は、「日本人ですか」と訊いて来た。ソウ姉さんと妻は一緒に、「はいそうです」おいおい君たちは韓国人だろう。

その人は日本人で、ここオ・ヴェールに住んでいるらしい。しばらく話すと、ソウ姉さんと妻が実は韓国人だとバラス。するとその人は家に戻り1冊の本を持ってきた。

「この本、韓国でも翻訳されだしされたんだよ」と、ゴッホのことを書いた本を出してきた。

「あ、それ私持ってますよ」と思わず声を出した。

なんとその人はゴッホ研究家の佐々木氏であった。なんと偶然だろうか。

少し話した後、ソウ姉さんと妻が家を見せてくれませんか頼む。日本だと他人の家なんて興味がないがヨーロッパだと興味がある。なんとなく佐々木さんは嫌がった顔をしていたが、しぶしぶ了承。いくら同じ東洋人とはいえ、知らない人をいきなり家に入れるのは抵抗があつただろう。

家に入り、私が話しますとすぐに佐々木さんの不安は解消。佐々木さんの奥さんも出てきた。

実は奥さんも一緒に本を書いている。

私はゴッホ美術館にプレゼントしようと思っていた歌川広重の名所江戸百景をプレゼントした。ゴッホ美術館が冷たい態度だったのでプレゼントしなかったのだ。

佐々木さんはゴッホ研究家であったがクレポンは始めてみたので

びっくりしていた。

ゴッホはクレポンも何点が収集していて、この色使いがゴッホの絵に影響を与えたとの私の説に、大きく頷いていた。

佐々木さんは元大使館大使。ヨーロッパの大使だったのでゴッホ研究もできたようだ。なんとあの藤田嗣治とも会ったことがあるらしい。

一度ホテルにチェックインをした後、直ぐに佐々木さんの家に戻り夕食をご馳走になった。夕食といってもいきなりの訪問だったので、パンとワインとハムだけであるが楽しい夕食であった。確か12時過ぎまでいたと思う。ワインも数本あけたと思う。私は病気だからワインは飲めなかったが妻とソウ姉さんはたらふく呑んで、いい気持ちでホテルに戻った。ホテルといってもそこは乗馬場のホテル。馬小屋を改装した部屋じゃあないのという部屋で寝た。

最後です

オーヴェール2日目。

初日に肝心なところを回ったから今日は見学するところはラヴー亭くらいかなつと思つたからゆつくりと出かけたかったが、朝、目がさめるのが早く、普通のチェックアウトの時間に出た。まずはラヴー亭。ゴツホの部屋を見なければ何しに来たかわからない。

ゴツホはラヴー亭の2階に下宿していると思つただけ、その上の屋根裏だった。2階が何の部屋だったか分からないけど、今はミュージアムショップになっていた。

細い階段を上りゴツホの部屋に着くと、せまい。小さなベッドとイスを置いたらもういっぱいである。小窓がひとつあるが、部屋は暗い。これだと部屋で絵を描くのは難しく感じる。

部屋はもうひとつあり、ゴツホと同じオランダ人でゴツホから絵を教えてもらっていた、ヒルシッフの部屋である。ゴツホが自殺したときテオに知らせに行ったのもヒルシッフだった。

知らせを受けたテオ、ヨー、ピサロ、タンギー爺さん、ベルナーは駆けつけたと思う。ロートレックは????忘れてしまったけどどこかにいっていて連絡つかなかったかな・・・この辺、誰が来たか書いた本あったんだけどなあ。でもお葬式でテオがゴツホの絵を壁いっぱい飾り、好きな絵を持っていってくださいと言つたのは覚えている。医師ガツシュはたくさんの絵を持って行つたらしい。ゴツホの部屋を出て、ソウ姉さんがラヴー亭で食事ができるのか聞いたら、できるという。それもゴツホの食べた食事を再現して出しているらしい。直ぐにランチ予約。

ラヴー亭に入ると、ゴツホがいつも座つていたところを教えてください私たちのテーブルの隣だった。いちおうその席に座つて写真を撮りました。食事はまあまあかな。レバーをつぶして作つてある料理は素朴でなんともいえない味だったけど。妻が日本に戻つて再現

したけどあの味じゃあなかったな。ヨーロッパの昔からの田舎料理だと思う。

食事をしているとき前のテーブルが家族で来ていたのでソウ姉さんが話しかけ、盛り上がった。と、行っても私たちは言葉分からなかったけどね。

ラヴー亭をでたところにアドレーヌ夫妻の娘アドレーヌの肖像が看板に描かれていた。確かガツシユ医師にも娘がいて、ガツシユはゴツホが娘に色目を使っていると思い、ゴツホを遠ざけたりしてたはず。

妻がゴツホの墓にもう一度行きたいと言った。ゴツホとテオの墓に花を飾りたいというのだ。そこで街の花屋に行き、妻とソウ姉さんが花を選んでいるときに私は不動産屋の張り紙を見ていた。

田舎町なのに不動産は高い。5000万円〜1億円くらいだ。普通の家で。佐々木さんの家できつと7〜8000万円くらいだと思う。

花を買い再びゴツホの墓に。墓の裏手の景色がゴツホの絵にとても似ている感じがした。

墓地を離れ、教会に接している裏通りの道を歩いていくとそのガツシユの家がある。今は記念館になっていて、家の内部も見学できる。

医師ガツシユといえばゴツホが描いた「医師ガツシユの肖像」が約124億5700万円で、当時世界最高値で日本の大昭和製紙の会長がオークションで落札したのが有名だよな。

「医師ガツシユの肖像」は2枚

ちつとあるかもしれないけど

あって、オークションで落札されていないのはオルセーにあります。大昭和製紙の会長が落札したほうは、その後アメリカのコレクターに買われたみたい。オルセーのほうはガツシユが描いた偽物とも言われている。

ガツシユの家を離れ、裏通りをもっと奥に歩いていく。実はゴツホの記念館みたいなのがあって、そこで、ゴツホがモデルとした描

いた場所が載っているパンフレットがあり、それを頼りに歩いてた。だから裏通りだけど、もつと先に行こうという気になった。でもしばらくするとソウ姉さんが疲れてきたのがはつきり分かり、オーヴエールを離れようかなと思いい、「姉さんの住んでる街に行こうか」と私が言った。

実はオーヴエールの次はパリのモンマルトルに行こうと思っていたのだが、旅もこのくらいの長期になると疲れが出てくる。ヨーロッパだったらどんなに長く旅しても大丈夫だと思いがちだが、非日常的な暮らしだからこそ、始めは興奮するのであって、一週間もすると非日常が、日常の暮らしに感じはじめ、日常を感じたら疲れが出てきて帰りたくなるものなのだ。

私はまだ大丈夫だったがソウ姉さんが始めに疲れが出たようだ。ソウ姉さんの疲れを見ると、これからパリに行こうという気にはなれず、ソウ姉さんの家に帰ろうと言ったのである。

今回の旅でソウ姉さんは我が家にもよってと言っていたが、方向がまったく違い、次回、アルルとサン・レミのとき寄るよと言っていたのだが、予定変更。

ソウ姉さんは私の提案に顔が一瞬で変わった。とても嬉しそうな顔をして、元気な顔になった。この時点で私たちの今回のゴッホの旅は終わりである。

私はサン・レミを残し、ゴッホの主要な足跡の地は訪ねることができた。

今回でゴッホの旅は終わりです。番外編としてパリとかアルル、それにソウ姉さんが住んでいる1400年代の街チエール(Thiers)もいつか書きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2570p/>

ゴッホの旅

2010年12月26日00時26分発行